

〔書評〕

渡辺善太著

『「出エジプト」以前』

一九七二年 日本基督教団出版局

服部 嘉明

本書は、その序文で著者自身が述べている如く、著者のライフ・ワークの二つの極の一方を占める労作である（他の一つは、既に出版されている聖書論）（pp. 1-6）。内容的には、著者が一九一八年以後に、聖学院神学校と、同志社大学神学部においてなした「セミチック文明の史的研究」の講義原稿を基礎に、最近の関連文献を参考にして、著者自身が出版に際して手を加えたものである。

著者渡辺善太氏は、既にわが国における旧約学者としては元老的な権威者であり、聖書学の分野に加えて、牧会的な実践面に関しての大作である「渡辺善太全集」（全六巻）を数年前に出版しておられ、その貢献は多くの人々によって高く評価されている。

本書は、出版という観点からすれば、著者八十七才の労作である。単なる過去の講義録の収集でなく、今日まで著者がたゆ

まず研究して来られた博大な学識経験を土台として整理され、記述されたものである。『「こんな形」でまとめられた』と著者は謙遜に言っておられるが（pp. 6-7）、実に立派なものである。

本書の内容そのものは、目次が示す如く、総説のあと、三編からなっている。先ず、総説では、本論（一、二、三編）の理解上必要であり、有効と考えられる諸事項が親切に説明されていて、本書が取扱っているような専門的な分野に関する特別な予備知識又は情報を持ちあわせていない読者にとっては極めて貴重な内容である。即ち、『「出エジプト」以前』これを具体的にいえば、『セム・ヘブル・イスラエル原始像』となる（p. 3）という本書名の説明に始まり、取り上げられている研究範囲、使用されている用語及び語彙の説明、地理的背景とセム族発祥地をめぐる古今の代表的諸学説の紹介、ヘブル思想の特異性とギリシヤ思想との対比、民族移動の歴史的概観、言語学的分布に基づく文献及び考古学的発掘資料などである。この書評の筆者は、この八八九頁に及ぶ大作の全体を読むことに困難を憶える人々にも、是非この総説の部分（七五頁）の一読をすすめたい。

本論の第一編では、イスラエル民族の根元を探るに当って、著者が最も妥当と考える揺籃地アラビヤのセム族について、地理、歴史、社会、宗教など、生活及び文化全般にわたる研究が綿密になされている。それに加えてアラビヤ研究史が年代順に

紹介されているのは、講義の受講者、又は読者にとつては有益である (pp. 114-122, 151-169)。

第二編では、イスラエルと「ヘブル」という呼び名と、それらがもっている相互関係を、イスラエル民族の形成の初期の姿として論議を進め、旧約聖書の族長物語の取扱ひ方、特に、一般歴史で言われるヒクソスの民族移動が、旧約聖書の族長の動きと、どのような関連性をもっているかを年代的に、社会的に、歴史的に、又、宗教的に論じている。特に、著者は比較的詳しく、(pp. 455-466) 旧約聖書の族長時代の研究で、二大主流をなすオールブライト・ブライト学派と、アルト・ノート学派の法論と主張点を紹介し、その両学派の貢献と妥当性を認めつつ、文学的歴史資料を中心とする伝承史を重んずるアルト・ノート学派に対して、考古学的発掘資料の研究を重んずるオールブライト・ブライト学派に、結論的には賛同的な意志表示をしている。「その結論は、この客観的歴史的立場からみて、いずれが正しいかということに対する『力説的断定』があったというよりは、オールブライト・ブライトの主張の方に対して、英語でいう *fair*, すなわち、われわれの母国語で、公平だという感じがもたれていた。これが本書において、この部分の叙述にこの方を主としてのべて来た理由である」(p. 484) と著者は明言している。従って、「族長物語」の史実性は、本質的には肯定的に理解されている (pp. 484-485)。

最後の第三編では、イスラエル民族にとって究極的な定住の

地として考えられ、聖書神学的には、契約思想の成就として理解されているカナンの地が、元来どのような所であったかを、その地の先住諸民族を社会的、宗教的、政治的、言語学的、及び文化史的な多角型的観点から検討している。古代中近東地域における宗教及び、社会の百科辞典的情報を得る資料としても重宝である。

全体としては、如何にも教科書又は、講義録らしく、目次を見てもすぐわかるように論点が秩序整然と明示されている。(だからと言って、決して読み難いものではなく、元来講義形式のものであったので読んでいても講義を聞いているかのような気分ですむことが出来る)。又各項目のあとには、関係のある文献を極めて親切に、古いもの、新しいもの、更に邦文のものに到るまで挙げられている (例、pp. 37-38, 83, 49-50, 121-122, 266-267, etc.)。更に、著者の学問的良心が、一方向的に或説を支持するのではなく、古い説に対して近代説が妥当であると判断される場合には、著者の判断で修正されている点 (pp. 42, 92, etc.)、問題点への著者の疑問の表示 (pp. 111, 199ff.)、及び著者の賛成意見の明確な表示 (pp. 195, 789ff., etc.) などによくあらわれている。特に、この書評筆者の注目をひいたのは、第一編中の原始セム族の宗教生活の項 (第四章) で、実によく整理された適切な宗教 (史) 学の概論とも考え得る卓越した内容である (pp. 261-446)。是非一読をすすめたい。又、第三編で、カナン諸族の発展の説明に立って、「ヒクソス」と呼ばれている民族的の一

群の名称の説明と共に (p. 704f.) ヒクソスの移住と、族長たちのエジプト移住とを殆ど同一視しようとする論説は一般的に受け入れられていることを述べつつ、出エジプトそのものも、そのヒクソスのエジプトからの追放と同一視しようとするホルの見解に関しては、年代的な困難を指摘し乍ら、それを正面から否定せず、可能性のあることを認めて、将来にその問題の解明をゆだねている注意深い姿勢と、問題点への洞察力は賞讃に価する (pp. 711-712)。

唯、この書評筆者にとって気にかかるのは、伝統的に表現され、維持されて来た遊牧民の農耕民に対する対比的、(或は、優越的) 態度又は姿勢は、単なる社会的自尊心のみでなく、セム・ヘブル・イスラエル民族の信仰的 (宗教的) 姿勢の表示として更に一層積極的に見るべきではなからうかと思う点である (「この自尊心は宗教的理由と結びついて……」とは述べられているが、二〇八頁)。本書の範囲外ではあるが、族長たちがパロに對しなした明白な意思表示など (創世四六・三四) は、その一例と考えられる。

結論の部分では、セム族の貢献として、アルファベットの言語学的なものをあげ、フェニキア人をカナンの媒介人とする見方をし、又、宗教における唯一神教 (思想) をも、もう一つの貢献として挙げ、宗教 (史) 学を考える時、学問としても必然的に「至高神信仰」に関する課題を取扱わねばならない、と著者自身のキリスト者であり、学者である姿勢が力強く最後

の部分で打ち出されている。キリスト教界は勿論のこと、他の分野においても貴重な研究資料として今後長くその価値が認められ、重宝がられる大作である。

(大阪基督教短期大学・神学院教授)

名尾耕作著

『エブ記』

一九七二年 聖文舎

大山 武 俊

本書は聖文舎刊行の「信徒のための聖書講解―旧約」シリーズ中の一卷である。著者は日本ルーテル教団議長、日本ルーテル神学大学の教授であり、新改訳聖書旧約の部の翻訳主任をつとめられた方である。そのため本書使用のテキストは新改訳が用いてあり、従来の口語訳聖書とも比較がなされているので、読者にとって便利である。このように新改訳聖書を採用したために、口語訳 (聖書協会訳) との相違が浮きぼりにされていて大変興味深い。例えば、一三・一五、一六・五、一九・二六、二一・一六―一八、二三・一七等であるが、これらの中には両者全く意味が正反対の場合が多く、多くの信徒が迷うところである。特に一三・一五は重要な箇所である。著者によれば、

「ヨブ記が正典に含まれていることに對して、紀元九〇年に開かれたユダヤ人学者（ラビ）たちのヤムニアの會議で次の点が問題となった。それは一四章一二節で死人の復活が否定され、九章二三節―二四節で神の正しいさばきが否定されていることであつた。しかし、一三章一五節で『神が私を殺しても、私は神を待ち望む』といつて、ヨブが愛をもつて神に仕え、神を恐れて惡を避け、潔白であつたこと、それにまた、ヨブ記に、伝道者の書、雅歌、ルツ記、エステル記にない主ご自身のことばが含まれている、ということの問題が解決した（一〇ページ）。それほど大切な個所であつても、口語訳には「見よ、彼はわたしを殺すであらう。わたしは絶望だ。」となつてゐるので、まさに正反對の意味となつてしまふ。この紙面の制限によつて、この点をくわしく説明することはできないので、本書を読んでほしいと思う。その他、新改訳そのものの間違いや誤植といったものも挙げられている。例えば七・二〇、一四・一八、二二・三〇。これらについてもここで説明できないので、本書を読んでほしい。

次にヨブ記の文学的構造については、思想劇、對話劇、詩劇というように見ているが、もう一つ古代イスラエル共同体の裁判形式という説をも紹介している。これはヨブ記の論争様式をもっとよく説明できるものと私は思つてゐる。更に、エリフの登場や、エピソード部のヨブの回復物語等に関して多くの学者が疑つてゐるが、本書の著者はそれらを真正なものとして深

みをもつてとらえてゐる。

最後に本書が最も力を入れている点にふれよう。それはヨブ記の中心メッセージを福音的観点からとらえることにある。これは著者が「ヨブ記に現われた作者の福音」（『途上』誌昭和四七年六月発行）においても発表されてゐるところである。つまり、ヨブ記の記者はいわゆる第二イザヤの流れをくむ者であつて、その流れの中で苦難と復活を見てゐるということである。「イザヤは、罪のない受難のしもべが、なぜ、苦難をうける、なぜ、死ななければならなかつたかの意義を詳しく告げている（五三章）。それは、ひとりの受難のしもべの代償的な死によつて、すべての者が生かされるという逆説的な真理についてである。作者がヨブ記の資料に義人ヨブの苦難を選んだのは、苦難の神秘性を解決するためというより、その心底には、受難のしもべの死が契約の民イスラエル人のためであるばかりではなく、万民の救いのためであることを、その表現をかえて知らせるためではなかつたらうか」（三四ページ）更に、一四・一四の解説において、『人が死ぬと生き返るでしようか』というこの設問だけを取り上げてみると、その答えは二つある。その一つは『生き返らない』である。……もう一つの答えは『生き返る』である。……ヨブは先に、神が自分を殺しても、なお、神に信頼する、という信仰告白をしてゐるのだから、この神への問いは、その信仰を確認するためである。その信仰は、將來、死んで後、よみで価値ある生活ができるということを信ず

るのではなく、神が死を滅ぼし、死に支配されてゐる死人を生き返らせて下さることを信ずる信仰である」（一六〇―一六一ページ）。次に、一九・二五の解説において、「それを証人として天におられる方（一六・一九）が『贖う方』として自ら代価を払つて死に渡されたが、よみのちりの上に立たれること、すなわち、神のよみの国への介入は神の謙譲であることである……『贖う方』は、よみに下り、死によつて死に打ち勝ち『生きておられ』、ちりの上に伏さないで、『立たれる』のである。」以上であるが、著者はこの難解といわれるヨブ記をわかりやすく、しかも学問的に書き上げること成功してゐるのである。

（聖契神学校教務主任、旧約学教授）

J. Barton Payne, editor

“NEW PERSPECTIVES ON THE OLD TESTAMENT”

Word Books, Publisher, 1970.

富井 悠夫

〔書評〕

本書は、ホイートンカレッジの旧約学教授J・B・ペインが自分も含めて十七人の福音主義神学者の旧約学に関する論文を編集したものである。その構成は、(一)史料編集に関するものとして、「古代オリエントの申命記主義とO・T」「現在のエジプト

学とO・Tとの關係」「エステル書の歴史性」。(二)五書に関するものとして、「創世記一章―二章の文学形式」「出エジプトの年代」「聖書神学的立場から見た幕屋」。(三)詩歌に関するものとして、「ウガリット語と詩篇の神学」「O・Tの知恵文学」。(四)預言書に関するものとして、「第二次大戦以降の預言書研究」「イザヤ書二四章に見るイザヤ書解釈の原則」「ダニエル書のアラム語と比較した外典創世記のアラム語」「近東におけるギリシアの影響から見たダニエル書中のギリシア語」。(五)本文批評に関するものとして、「死海写本とO・T」「サマリヤ五書とO・T本文」。(六)神学に関するものとして、「主の契約」「正典と契約概念の相關關係」「O・TとN・Tの關係」となっており、その全内容を簡単に紹介、批判することは困難であるので、特にL・T・ウッドの「出エジプトの年代」とM・G・クラインの「正典と契約概念の相關關係」をとり上げて紹介してみたい。

A 「出エジプトの年代」

ウッドは、グランドラピッズバプテスト神学校旧約学部長であり教授である。結論から云うと、その立場は、早期出エジプト説で、前一五世紀の半ばに出エジプトは行なわれたという。議論は、大きく二つの証拠に基づいて進められてゐる。その一つは、聖書から、他は聖書外の証拠の検討と解釈である。

先ず聖書からの証拠として(1)列王記上六・一をあげて、出エジプトはソロモンの神殿工事開始(九六六年B・C)より四八〇年前に起ったという事から、一四四六年B・Cが、その年代であるという伝統的な論拠を示す。(2)次に、士師記一・二六のエフタの言葉から、エフタより三〇〇年前に出エジプトがなされたという事から、大体一四〇〇年B・Cと推測する。(3)士師時代の長さに関しても、イスラエル王国設立を一〇五〇年B・Cとして、逆算の中に四〇〇年の荒野の生活の期間や、ヨシユアの指導期間を大体二〇〇年と計算し、またサムエルの治めた期間を二〇〇年位として数え入れると、士師時代が大体三〇〇年ということになる。(4)歴史的相互関係として、聖書の記事と、エジプトの歴史を考える時、早期説が有利であることが二つの点から見られる。一つは、出エジプト記一・一一のピトムとラメセス建設の命令を出した王は誰か、という点である。後期説によれば、それはラメセス二世(一三〇四―一二三八B・C)であって、町の建設命令を出した王であると共に、出エジプトの時の王である、と考える。しかし、聖書によれば、町の建設命令から出エジプト迄は、少くとも八〇年以上はあったことが分る(モーセの誕生から出エジプト迄)ので、そうするとこの王は、出エジプト迄に一〇〇年以上も生きていたことになってしまふ。ここに、後期説の困難さがある。これに反し、早期説は、出エジプトの時のパロに関し、最も状況に適した王をあてることが出来るので何の困難もない。もう一つの点は、出エジプト

記二・二三―二五にある、モーセがミデアン滞在中に死んだ王が誰か、という事である。聖書の記事に照して見る時、この王は、四〇年前にモーセをミデアンに追いやった王であって、この王の死によって、モーセはもう一度エジプトに行くことができたのであるから、出エジプトが起ったのは、少くとも四〇〇年間の統治をしていた王が死んだ直後という事になる。早期説によれば、一四五〇年B・Cのトトメス三世の死がそれに当る。彼は単独で三二年間も治めたが、それ以前の、かの有名なハトシェプスト(一五〇四―一四八二B・C)との共同統治時代にモーセはミデアンにのがれたと考えることが出来る。以上の聖書の証拠を根本に、次は聖書外の考古学的証拠によって、論を進めるのであるが、カナン征服の時期についてはエリコの発掘、ラキシ、デビル、ハゾルの破壊、アマルナ土板による証拠、セテ一世とラメセス二世の軍事的遠征の記録を検討し、最後に、エジプトからの脱出の時期については、ピトムとラメセスの町、エジプト王朝の首都の位置について扱っている。結論として、ウッド自身、聖書外の七つの証拠の中、四つが、後期説に有利のように思われるという(エリコの発掘、トランスヨルダンとネゲブには一九〇〇―一三〇〇B・Cに定住の形跡がないこと、ピトムとラメセスの町はラメセス二世によるという説、エジプトの首都は一九王朝には北部にあったという説)が、しかし、聖書の記事は、あく迄、早期説を支持し、決定的であると述べる。

「現代のエジプト学とO・Tとの関係を論じているC・E・ドフリースも、エジプト学の成果を認めつつも、出エジプトの年代に関しては、聖書の記事が一貫して示しているという事と、考古学的、歴史的資料が、現在のところ、決定的なものを提供していないという理由をあげて、早期説をとっている。

旧約年代学の焦点ともいふべき大きな問題だけに、早期説・後期説、の決着は至難であるが、ウッドのとする聖書中心の態度は、考古学的、歴史的資料を検討してのものだけに、早期説を支持する者にとって心強い武器となる。尚、A・ピータルス著「旧約歴史ノート」第二巻の中に、古いながらも、早期説、後期説がまとめて紹介されているが、両者を比較して気づくことは、エリコ発掘の成果が、一つの大きな問題点となっているという事である。

B 「正典と契約概念の相關関係」

ゴードン神学校のM・G・クラインによるこの論文は、これ迄比較的等閑にされて来た感がある。O・T正典形成の実際の歴史を、特に、古代近東の条約形式に照らして考察したものであり、四つの見出しに分れて扱われている。(1)正典は契約に由来する。

正典としての聖書は、契約の主としてのヤーウエが、その僕としての民に与えた条約の中に起源をもっている。一言で、正

典は契約に固有のものである、ということであり、シナイ契約やその他の契約が古代の宗主と家臣の契約と形の上で同じであり、それを記録にとどめる、という点でも似ている点をあげる。(2)次に聖書の契約的構造という見出しの下に、古代でもそうであったように、条約は、偉大な王と家臣によって、改訂されたという事から、契約条項は決して静的なものではなく、歴史的な変化に應じるものであったこと、そして、聖書の契約も、決して閉じられたものではなく、特に、贖罪の歴史に應じて、旧約から新約へと神によって改訂された点をあげる。このように、旧い契約と、新しい契約という聖書の記録化は古代の条約更新の形と一致することをのべた後、(3)旧約聖書と教会の正典という項目で、旧約聖書は、古代近東の条約と同様、「永遠のもの」であって、しかも、変更されるということと、正典本来の意味から言って、旧約は教会の聖書ではあるが、現行の正典ではないという。その意味は、旧約も新約も、共に神の言葉であり、贖罪の契約に関するキリスト論的統一をもっている、モーセの時代もメシヤの時代にも関係する神のみ旨を示すものであるが、それにもかかわらず、旧約は新約ではない、という点を忘れてはならない、ということ、即ち、正典と聖書の区別という事であり、旧約を改訂した新約こそ、現在の規準としての契約正典という特別な權威をもっている、と述べる。ここで、再び、契約と正典との密接な関係を強調し、契約と正典は相互に規制し合うものであり、正典性はその契約が関係してい

る特別な範囲に制限される、という点をあげて、旧約によって規制されていた契約は、今や新しい契約によって取って代えられたこと、新しい正典が古い正典に取って代ったことを指摘する。(4)の項では、契約的正典の古代性と現代批評家の時代錯誤を指摘する。

一読して、旧約正典という問題に興味深い示唆を与えるものであり、特に、古代近東の条約文の形式と、その改訂の方法を旧約・新約に適応している点は面白いと思う。唯、この論文が、旧約正典の歴史的発祥の時点にのみ光を当てているのかかわらず、古代近東の条約改訂を、直接新約と旧約の関係にあてはめている、という点に行き過ぎがあるのではないかという気がする。

(日本基督教改革派キリスト告白教会牧師)
(東京キリスト教短期大学講師)

松本治三郎著

『新約神学』I

一九七二年 新教出版社

宮村 武夫

本書は、現代日本の新約学分野で指導的役割を果たしてお

られる著者によって、明確な意図と大きなスケールのもとに書かれた始めた新約神学三部作の第一巻である。

三百ページを越すこの第一巻において、著者は、新約神学のプロレゴメナ・序説について論じている。なぜ、これ程綿密なプロレゴメナ・序説が必要であると著者が考えるに至ったかを知ることが、本書の特徴を理解する上で何よりも大切である。この点に関して、著者は、まえがきにおいて、以下のように述べている。

「研究に着手してから数年にして私は、新約神学のプロレゴメナ・序説の必要に気づいた。そこでは、史的批判的判定と神学的解釈との区別と結合、その関係の正しい方法論的認識を要求する、原始キリスト教宣教の史的イエスとの関係を問題とし、私には特にキリスト論の起源をめぐって論じられる」(一ページ)。

つまり、著者は、史的批判的判定と神学的解釈の区別ばかりでなく、両者の結合を考え、これを方法論の課題として深く展開している。こうした方法論的自覚をもって、史的イエスと原始キリスト教宣教の関係を、キリスト論の起源という中心点をめぐって考察しようとする。それゆえ、この課題は、「キリスト教と教会と全神学の致命的な問題であり、しかも他の神学のどの分野でよりも、それは、新約神学序説の課題として、取り扱うべきである、と考えた」(一ページ)と言われる程のものである。

以上のような著者の明確な意図に基づき、本書は、「序論」、「第一篇イエス」、「第二篇原始キリスト教の宣教」という構成で成り立っている。

序論では、一章の「新約神学の歴史」において、様々な傾向の学者との対話がなされ、著者の明確な問題意識がいかなる歴史的必然性を持つかを示す。二章の「新約神学の方法と概念」においては、史的批判的研究の重要性とともに、その批判的徹底としての神学的解釈が主張される。さらに、こうした方法によって探求される新約神学は、「主イエスを信じる」との唯一の基盤に立って、「新約聖書の記者たちが自分の生とその置かれてある『生活の座』において、したがって彼らの出会うすべての問題を自分の問題として、批判的に対決しながらさぐり求め、生き、戦い、そしてひとに宣べ伝えた独自のケリユグマ」(五九ページ)の神学であると、明瞭な概念理解が与えられる。三章の「新約神学序説の根本問題―その見取図について」は、著者自身による本書の要約と言える。以上のように、序論を通して、著者の神学的姿勢が明らかにされる。それは、新約聖書の各書を、その歴史的コンテキストに据え、「できる限り史的(釈義的)」に追求して、そこで示される(出会う)イエスと新約聖書のケリユグマと神学とを(四二ページ)、今日の状況の中で、解釈の伝統との絶えざる対話を通し、「私」の福音となるまで主体的に聞き続けることであり、牧会者、神学教師としての長い著者の歩みに一貫しているものと考えられる。

第一篇イエスは、以下の三章を含む。

一章 イエスの出現

二章 イエスの神の国宣教

三章 イエス自身(ペルソナ)とその最後

まず、イエスの出現を、その宣教的背景を重視しながら描き、イエスの宣教の特徴を、「人間と世界」、「神」、「神の国」などの主題に基づいて考察する。さらに、イエスの宣教において、宣教と宣教する者とは決して切り離すことができない事実が指摘される。この点から出発する三章は、第一篇の中心として重要な章である。そこで、著者は、ブルトマンを中心に、E・フックス、ケーゼマン、H・コンツェルマンなどと対話を展開しながら、「イエスの宣教と行動、むしろイエスその人の、聞き接する人々との関係、またさらに人格的あるいは実存的出会い、聞いて行なう、聞いて従う、信じる、交わり、関係となり、それはやはり、信仰の出来事、信仰の事柄として起こったのである」(一五八ページ)と自らの理解を明らかにする。それゆえ、「私にとって史的イエスは原始キリスト教ケリユグマと新約聖書の信仰と神学の、単なる一前提ではなく決定的前提であった。むしろイエスの宣教とその働き、そのペルソナに、キリスト論の始め、起点のあることを認めるのである」(一五八ページ)との著者の立場が成り立つ。こうして、著者は、史的イエスと原始キリスト教ケリユグマの間に、一方向的な断絶を主張するのではなく、両者を直接的に同一視するのではなく、

「このケリユグマは史的イエスなしに成立しないのみでなく、決して史的イエス以外のものを語らないのである。ケリユグマは、その根本において、史的イエスの解釈に他ならないのであるから」(一五八ページ)と慎重な立場をとる。まさにこの事実についての確信から、「かくて私たちの新約神学は、史的イエスを、そして原始キリスト教ケリユグマの史的イエスとの関係を、単なる前提としてではなく決定的前提むしろ基礎論として序説の課題として取り扱うことになったのである」(一五九ページ)との著者の新約神学の構造が決定される。

第二篇の「原始キリスト教の宣教」は、以下の三章に分れる。

一章 史的問題

二章 原始教団の宣教

三章 異邦教団の宣教

ここでは、ガラヤ、エルサレム、シリアのアンテオケ、小アジアを経てローマに至る教会の誕生と成長に沿って、パレスチナの原始教団と異邦地の異邦教団の宣教が、キリスト論を中心に描かれる。

まず、原始教団の宣教については、イエスの宣教、イエス自身に隠されていたキリスト論が、現わなキリスト論に成る史的発端についての考察をなす。この困難な、しかし重要な課題は、イエスの死と復活、イエスの称号についての批判的検討を通してなされる。

この部分では、著者の復活についての理解が特に興味深い。

まず、「しかしナザレのイエスが十字架につけられて死んで葬られたという、そして彼が、弟子たちに現われたという、ことは、史的事実であり、それは彼らにとって決定的であった。そののみでなく、このことがないと、歴史として、原始教会も新約聖書もキリスト教も成立しなかったのである」(一八二ページ)と、誰も否定できない史的事実に立って、イエスの死後の弟子たちを中心に、原始キリスト教の発端を考える。さらに、顕現経験と復活の違いを注意して、「史的には、イエスの死、後起こったことは弟子たちの顕現経験である。そしてまた史的に言うなら、そこからイエスの死の事実をふり返っていわば解釈として、イエスの復活信仰が成立して彼らの新しい宣教活動が、伝道が始まったのである」(一八六ページ)ことを認める。それゆえ、「イエスの死と弟子たちの顕現経験はいわゆる史的事実であるが、復活は史的事実でない」(二二三ページ)というブルトマンの主張に同意する。しかし同時に、「彼が死人の中から甦えられた」ということの決定的意味を強調して、「弟子たちに現われたキリストは、復活者イエスであり、原始教団にとって、イエスの復活は現実に起こった出来事であると信じられたのである」(二二三ページ)と言い切る。このように、著者は、一方では史的事実を厳密に追求しながら、他方事柄自体の連続性を見失わない。それゆえ、「イエスとキリストとの区別は、その死人の中からの復活によって、結合統一されてイエス・キリストとなっている。だからイエスの復活は、キ

リスト論の転換点であり、また一度限りの『神の現わな啓示』であった。かくて、イエスにおいて隠された神の啓示があった、そしてイエス・キリスト神の子、主において現わな神の啓示がある、信仰の啓示がある(ガラテヤ三・二三―二五)、と言える、言わねばならない」(二七八ページ)と、史的イエスとケリユグマのキリストの関係について重要な指摘がなされる。

異邦地の異邦教団は、イエス、パレスチナの原始教団を前提として成立した。また、多様な展開をなしている異邦教団の根底に、「一つのケリユグマ、福音」と一つの交わりがあった(二五五、二五六ページ)。著者は、これらの連続性、統一性を確信しながら、新約聖書各文書の著者たちが生かされた多様な背景の中で、その宣教と礼拝を中心に、すべての問題を自らの課題として対決して多様な展開に、中心的関心を払う。すなわち、異邦教団のそして新約聖書の神学は、それぞれの「生活の座」にあって、極めて主體的、個性的な展開をなしたのであり、「その個性的独自のな所に、いのちがある、真理がある」(三〇五ページ)のである。それゆえ、新約神学は、「新約聖書各自の、それぞれ独自のアクセントを持ったケリユグマと批判的神学とを」(二六六ページ)生きたコンテキストを無視することなく論述することを、「第一の、最も重大な課題」(二六六ページ)とする。それは、単にパウロとヨハネの神学というだけでなく、福音書記者、パウロ、ヨハネ以外の新約各書簡の著者たちの、それぞれ多様な神学すべてが、重要なものとして評

渡辺善太著 『新約聖霊論』

一九七二年 日本基督教団出版局

斎藤孝志

聖霊論に関する良書が待望されていたときに、八十八歳の老神学者渡辺善太師によって正典的な立場から立派な新約聖霊論が発行されたことは、リベラル、ネオ・オーソドックス、オーソドックスの立場を越えて、日本のキリスト教会にとって喜ぶべきことである。高等批評家として、学名をとどろかした渡辺師が、晩年になってこのような聖書信仰そのものにもどったような聖霊論を発行されたことに対して、ある方はとまどいを感

じておられるかと思う。ご承知のように、渡辺師は、かつては、ホーリネス教団に属し、聖書を言々句々神の言と信じるファンダメンタリストであった。ところが、アメリカのリベラルな神学校（バークレーの太平洋神学校）を出て、シヤキシヤキのリベラリストとして帰国し、ホーリネス教団を離れ、リベラルな立場で知られる同志社大学神学部の教授となった（大正七年）。異端者のレッテルをはられて以来数十年、福音派からはシャットアウトされてきた。その渡辺師が徹頭徹尾聖書に忠実な聖霊論を出版したのだから、ある方々がとまどい驚くのは当然であろう。渡辺師も年をとり、天国も近づいたから、再びノスタルジアを感じて、昔の立場にもどったのだろうなどと推察される方もおられるかもしれない。新約聖霊論は、それほど、保守的で、福音的な立場から書かれている。しかしよく読んでみると（評者は、ノートをとりながら二度読んだ）、この聖霊論は、昔ながらの逐語霊感説の立場に立っていた者には、到底書けない書であることがわかる。渡辺師は一度その立場を否定して、自由な立場に立ちながら、「聖書とは何か」、「この聖書をいかに解釈すべきか」、「聖書全体を統べているものは何か」という三つの問いを血みどろになって問い、四十一歳でドイツにまで行き、二年間ベルリン大学、フライブルグ大学、ボン大学に学び、日本に帰ってきて、さらに二十年の間これらの問いを問い続けた。一九四九年、著者ちょうど六十四歳のとき『聖書正典論』を出版し、「聖書とは何か」という第一の問いに答えた。一九

五四年（六十九歳）に著者は、第二の問いに対する答えとして『聖書解釈論』を出版し、続いて一九六三年（七十八歳）に第三の問いに対する答えとして『聖書神学論』を出版した。著者は、正典論において、三十七年間の研究の結果得た著者独特の正典的立場と神学を確立した。それは、リベラルな聖書観、ネオ・オールドツックスの聖書観、オールドツックスの聖書観の短所を批判し、長所を評価した独特な聖書観である。この正典論には、靈感の項目は欠落しているが、「正典の統体的神学的理解」の部にキリストを証言させるもの、即ち聖霊についての論述が見られる。この箇所において、著者は、証言的、救済史的聖書解釈の立場を打ち出し、この立場の根源者は、聖霊であることを明らかにした。「聖書解釈論」において、著者は、意義決定的解釈（字義的解釈）、意味形成的解釈（救済史的、証言的解釈）、意図対決的解釈（聖書教義学的解釈）の方法論を展開した。意味形成的解釈の章の第三節で著者は、「聖書解釈と証言によるできごと」という主題で、聖書解釈の過程で、いつでも、どこでも聖霊のできごとが起り、その経験は、聖書解釈を深める要素であることを指摘した。聖書神学論においては、第二章の第五節「聖書の証言的構造論」の中で、聖霊による聖書解釈が、聖書神学建設の「カギ」であることを明らかにした。このようにして見てくると、新約聖霊論は、渡辺聖書学の底に流れていた聖霊論が体系的にまとめられ、展開されたと言わなければならない。聖霊論こそは、渡辺聖書学の冠であり、彼の聖書学をとく

「カギ」である。彼の正典論、解釈論、神学論の三部作を読んでいる者にとっては『新約聖霊論』は、当然出るべくして出たのである。長い間著者の心の中に温められ、思索されてきた主題が、ここに体系的に述べられたわけである。正典論も解釈論も、神学論も、否彼の一切の著作は、この聖霊論の立場から読まれるときに真に理解されるのである。逐語霊感説を捨ててから、「聖書とは何か」という問いを問い続けて学問的苦闘を続けること六十年、遂に彼は正典的霊感論という彼独特の立場に到達し、その立場から、本書が書かれたわけである。本書が発行された同じ年の六月に、『出エジプト以前』という聖書の歴史的研究の成果が発表された。同じ年に、立場の全く違う二書が同じ著者の手によって発表されたということは、ある人をまどわすかもしれない。しかし著者の正典論を正しく理解している者にとっては、これは少しも驚くに値しない。むしろ彼の正典論から当然期待されたできごとである。『出エジプト以前』に見られるような厳密な歴史的研究によって訓練されたような頭脳によってしか、このような神学的洞察と体系をもった聖霊論は産み出されないものである。世界に聖霊に関する書物は数多くあるだろう。しかしこれだけ、新約聖書全体に忠実で、しかも聖霊の聖句の内的連関に対する深い理解と洞察力をもった聖霊に関する書物は、世界に何冊あるだろうか。おそらく、本書は、今後長く、日本のキリスト教会にあって聖霊に関する名著として用いられることであろう。本書がドイツ語、英語に翻訳

されるなら世界の教会においても、聖霊に関する書物としては名著として用いられ、記憶されるのではないだろうか。さて、本書の内容であるが、紙面がなくなってしまうたので、アウトラインだけを紹介し、あとは読者が直接本書を読まれることを期待する。本書のアウトラインは、緒言、キリストの共働体たる聖霊、教会の創設者たる聖霊、キリストの証示者たる聖霊、神意の解示者たる聖霊、真理の解明者たる聖霊、救済の成就者たる聖霊、嗣業の保証者たる聖霊、聖書の「現前者」たる聖霊、結語となっている。緒言において、「著者は、キリスト教理解において、そのすべてを決定するものは、聖霊である（7）」というショッキングな言葉を記している。これがかつて福音派から異端者というレッテルをはられた学者の言葉かと疑いたくなる。「聖霊なくして、キリスト教理解なし」、「聖霊なくして救なし」（26）とは、緒言における最初の部に記された言葉である。七章の嗣業の保証者たる聖霊は、聖書の主張する終末論の紹介であるが、「かくのごとく原始教会の信仰者たちは、そしてその指導者たちは、この終末の問題に生命をかけた」（165）という言葉には、ドキツとさせられた。八章の「聖書の『現前者』たる聖霊」において、詩篇一九・130のお言葉を中心として、論が展開され、「これこそ実に『過去の』神言として、これを靈感せし聖霊のちからとわざである」（180）という言葉で、この最後の章が終っている。詩篇一九篇だけでは

なく、新約から同じ思想を述べている聖句が引かれたら、もつと説得力を持ったかもしれない。結語は、「神学なき体験は盲目であり、体験なき神学は空虚である」という有名な言葉で終っている。聖句が文語体で読みづらいのと、文体が固く、明治調の表現がところどころに見られるのが気になるが、しかし内容に引きつけられて再読味読させられる書である。

(東京聖書学院教授)

ブルース・M・メツガー著、橋本滋男訳

『新約聖書の本文研究』

聖文舎

松本祐三

新約聖書の本文に関する研究書に非常な欠乏をおぼえている日本の現状において、本書が翻訳、出版されたことは、大変意義深いことである。これまでも何冊かが公にされたが、大変専門的であったり、新約緒論の一部で触れられてはいても、余りに簡単すぎて実際の本文研究には役に立たなかったり、というわけで、遅まきながらも、本書が日本語の世界にも出たことはこの分野の入門書として助けになるだろうと思ひ、訳者に対し

ても感謝する次第である。

著者、ブルース・マニング・メツガー博士は、一九一四年に生まれ、プリンストン神学校で学び、そこでTh・Mを、またプリンストン大学においてはPh・Dを獲得された、新約学においては第一クラスの学者である。彼は一九四〇年以来、母校で教鞭をとり現在に到っている。Introduction to the Apocrypha (1957), The New Testament, its background, growth, and content (1965), 等の著者であるばかりでなく、多くの聖書辞典、専門雑誌への執筆者である。またメツガーは一九六六年に五つの聖書協会が合同で出版したギリシヤ語新約聖書の編集に加わった一人でもある。訳者、橋本滋男氏は、著者自身にも推薦されているように、プリンストン神学校出身の学者で、著者の指導を受けられたようであるから、最もふさわしい訳者であろうと思う。

著者は、その序文の中で、「本書の目的は新約聖書に適用される本文批評に関し、学問的、技術的な知識を学生に提供することである。」と述べ、続いて、この書の範囲に関して、「(1) り、それは本文批評の学問的取扱う範囲に言及している。」(2) 古代における写本の作製と伝達、(3) 新約聖書本文に最も重要な証言の解明、(4) これまでに印刷刊行されたギリシヤ語聖書に反映した新約聖書の本文批評の歴史」等が主なる内容である。筆者自身もかつて神学校でこの分野を学んだ時、本書が教科書であった。かなり特殊な専門的な分野の書ではあるが、基礎的な

著作として学生にとって、最適の書の一つである。

さて本書は次のようなアウトラインで書かれている。

第一部 新約聖書本文批評のための資料

第一章 古代における製本

第二章 新約聖書本文の主要な証言

第二部 ギリシヤ語聖書の印刷本における新約聖書本文批評の歴史

第三章 批評前の時代・公認本文の起源と普及

第四章 近代的批評の時代・グリースバッハから今日まで

第三部 本文批評の適用

第五章 学問的原理としての本文批評の起こり

第六章 現代における本文批評の方法

第七章 新約聖書の本文伝達における誤りの諸原因

第八章 新約聖書本文批評の実際

第一部は、書物が古代においてどのような材料でつくられ、どのような形態をとっていたかを述べることにによって始められている。また写字生たちが用いた文字の種類とか、彼らの書写上の習慣、例えば神、主などのギリシヤ語は短縮形が用いられた、等々詳細な点に到るまで書かれている。

第二章に入って新約聖書の本文に対する三種類の証言についておよそ七十ページを費やして説明してある。第一にギリシヤ語写本について、パピルス、大文字写本、小文字写本の順で、

述べられる。シナイ写本の発見は余りにも有名な話ではあるが簡潔に記されている。第二に古代語訳の中から、シリヤ語、ラテン語、ユプト語、ゴート語、アルメニア語、ゲルジア語、エチオピア語、古スラブ語等の訳本を紹介している。初心者にとって便利なのは、これらがどのようにギリシヤ語新約聖書の欄外に表記されているかを一つ一つ示していることである。そうでなければ、クレトニア写本がどのように表記されるかが分らず、ベシッタの記号も分らぬなら、実際には初心者にはアパレイタスを充分用いることが出来ない。

第三に教父の引用がおよそ三十名あげられている。

第二部に入ると本文批評の歴史をかなり詳細に記している。一五一四年はじめてのギリシヤ語新約聖書がヒメネスによる出版から始めて、エラスムスによる新約聖書の出版が、どのような書いているが、一度それが受け入れられると、ベルゲルのような敬虔な聖書の学徒であっても、こと本文批評に関してはなかなか人々には受け入れられず、公認本文は定着してしまう。エラスムスの業績が実際にはどのような状態であったのかをよく公平に記している。このような時代にもかかわらず、ステファヌス、ベントレー、ヴェットシユタイン、ゼムラー等によって異説の収集が続けられ、分類の方法に工夫がこらされて来た。

そして第四章に入ると、十八世紀後半の学者、グリースバッハによって近代的な本文批評の研究が基礎づけられたことを述

べて、学問的な本文批評が始まったことを論じている。彼は、アレキサンドリア型本文、西方本文、コンスタンチノポリス本文に三分し、これから原文に近いものを生み出すために十五のカノンを設定した。このような本文批評の考え方は多くの影響を与えた。ついにウエストコットとホートによってグループの分類、本文批評の方法等が確立され、公認本文は徐々に權威の座をおり、それは彼らの言うシリヤ型の一つであることがいよいよ明らかに、「公認本文の廃棄」に到る（一四〇—一六三ページ）。

著者は、第三部において本文批評の方法を論じる。近代的なものとして、クエンタンの統計的な方法を紹介している。しかし「この方法全般についての批判は、なんといつてもそれが余りに煩雑であるため、多くの写本に保存されているかなり長い本文には適用しにくいことである」（一八五ページ）。研究者によってサンブルが勝手に引用されることになる恐れがある。

次にはストリートによるもので、彼は古代キリスト教の諸中心地に流布していた本文型をそれぞれ分離してグループに分けることを主張した。即ち、アレキサンドリア型、東方型（この中にカイザリヤ、アンテオケ本文が含まれる）、そして西方型（これにはイタリア・ガリヤ、アフリカ本文が含まれる）とした。これが彼の地方本文説である。

第三には折衷法が紹介される。これは外的証拠だけでは不十分であるとして、主観的な面を重んじ、内的な蓋然性に注意を

編集委員会編

『新聖書注解』 新約2（使徒↓エペソ）
新約3（ピリピ↓黙示録）

一九七二～七三年 いのちのことば社

石丸 新

新改訳聖書をテキストとする注解書が、このような形で刊行されたことを、まず、多くの方々と共に喜びたい。新約1～3のうち、逆の順序で、3、2が既に出版され、残る1（福音書）の刊行が待たれている。

// 刊行のことばにあるように、この注解書は、次のねらいと特色を持つものとして企画された。

- (1) 信徒に聖書を学ぶ喜びを与え、信仰と実践を助ける。
- (2) 現代日本の教会と日本人の必要にこたえる。
- (3) 最新の聖書学の成果をくみ入れて、これを信徒の理解に供する。

〔書評〕

全三巻の執筆者は、十六人の日本人教役者であって、ほとんど全員が、日本福音主義神学会の会員である。同神学会の直接の出版活動ではないにしても、会員の学的研究・伝道・牧会の現場からの労作が、このような形で実を結び、広く日本の教会

むける。ハウスマン、C・H・ターナーの貢献は大である。

第七章においては、写本間における相違の原因がどこにあるかを論じる。それは写字生の聞き間違い、読み間違い等による無意識な変更もあるうし、意識的に意味を通じさせるため、文法的な間違いの好意的な訂正もある。

本書の最後の章において著者は実際にどのようにこれまでの学びを適用するかを示している。これは学生にとって非常に有益な章で、外的証拠として各本文型の主なる写本は何かをまとめ、評価のしかたがよく書かれている。また内的証拠をどのように見出してゆくか、その基本的な基準が示されている。ただ若しH・グリーンリーの様にこれらの本文型の主なる写本が表にされているとすると学生にとって便利だろう。最後にヨハネ七の五三―八の一一の例題をはじめとして、いくつかの例をあげているので、実際に初心者がやってみるのには好都合である。

翻訳の場合、しばしば注や索引が省略されがちだが、この種の本にこれは欠かせない。訳者の労を多とする。

所々、説明がなければ初心者にとって理解しにくい所もあるだろうが、彼にもこの書によって実際的な本文批評の作業が出来るようになると思う。神学校などで用いるには最適であろう。

（東京聖書学院教授、日本ホーリネス教団八王子教会牧師）

に貢献し得ることは、大きな喜びである。

説教の努めに任じられている牧師は、ひとりの例外もなく、聖書の釈義に基づいて、聖書を語っているはずである。説教原稿に至るまでの作業段階の中で、自分としての釈義ノートが年とともにページ数を増して行くのが当然であろう。今回の『新聖書注解』を読んで感じるのは、どの書の場合も、著者が説教のための労苦を重ねつつ注解をしているということである。いづれも、原稿を依頼されて、一息に書き下しできるような性質のものではない。たんなる釈義の作業、地道な講解説教の連続の中から生み出されたものである。「信徒のため」という意図は、この意味で、じゅうぶんに尽くされていると言えよう。

全体のもって行き方や、釣り合いという点からすれば、着実に版を重ねているティンダルの新約注解を思い起こせば当たっていると思う。分量から言えば、ティンダルの二〇～二五%引きというところであろうか。しかし、「使徒の働き」は、四百字詰め原稿用紙にして、七百枚に近い労作である。

全体として感じたことを挙げさせて頂くと――

(1) 語義の解説がていねいで、基本的に知るべきことが尽くされている。

(2) 文語訳、協会訳（口語訳）、新改訳を比較して論じるところ

ろが多く、その取り扱いが公正で、新改訳に偏するところがない。それぞれのことばや節、全体のメッセージを多面的に知る助けとなる。

(3)どの著者も、少なくとも十五、六冊の注解書を参照して、それぞれの特色を汲み入れている。ただし、特に、名前を挙げるほどでもない、ごく常識的な解釈の場合にも、カッコの中に注解者の名前があるのは、やや目ざわりになる。

(4)各書の緒論のうち、その書の主題の展開や、中心的な神学思想について論じている部分は、興味ぶかく、助けとなる(たとえば、ヘブル人への手紙の緒論六「本書の福音理解」など)。特に注目させられたのは、第一コリントの緒論五「主題と展開」であった。礼拝を軸とする展開を、著者・宮村武夫氏は指摘している。日本福音主義神学会関東支部会の木曜研究会で、同氏の「コリント第一の手紙の主題とその展開」と題する発表がなされた(一九七二年九月二十一日)とうかがっているが、モノグラフとして手にしたい主題である。

(5)第三巻の巻末および第二巻のはじめに収録されている五つの論文は、いずれも読みごたえのあるもので、それぞれ、独立したモノグラフとして広く読まれるべきものと思う。

(6)この注解は、現代日本の教会と日本人の必要にこたえることをねらいとしてはいるが、直接に、現代日本の情況に触れる部分はごく少ない。と言うよりは、注解書としては、これは至難のことであって、結局は、現場の説教者が、それぞれ、自分

として労苦すべきところだと思う。「釈義と説教」という、古くて新しい問題を、いまさらのように意識させられた。

この注解を手にして、さらに欲張った願いを言えば、各書の中心主題・神学思想についての、モノグラフの刊行をぜひ考えていただきたいということである。これが並行して実現されれば、聖書釈義・聖書神学・聖書的神教の三本柱でもって、信徒の受ける益はきわめて大きいと確信するものである。

(日本基督教改革派仙台教会牧師)

E・F・ハリソン、G・W・ブロムリ
カール・F・H・ヘンリー編

ベーカー『神学事典』

一九七二年 聖書図書刊行会発行
いのちのことば社発売

山崎 鷺 夫

れたためで、原書が刊行されたのは一九六〇年だから、訳書として本書が出たのは、十二年後のことである。翻訳の仕事としても大変だったし、原稿としての編集、校正としての段階の努力も並々ならないものがあつたに相違ない。原書の英文見出しと邦訳の見出しとの調整も出来上って見れば何でもないが、訳語の統一がまた一仕事だったろうし、本書が出版されるという噂を聞いてから十年位はなるのだから、それに出版資金もかかるし、また出版されても右から左へ売れるといった際物とはちがって、これは出版社の大きな犠牲であり、また神学界への大きな貢献でもあるので、ご苦勞さまでしたと関係者の方々に先ず賛辞を送るものである。

次に、編集者を紹介すれば、米国フラー神学校の新約教授E・F・ハリソンが編集長、キテツルの新約神学辞典英訳者のG・W・プロミレイ、元クリスチャニティ・ツデーの主筆カール・ヘンリーが編集協力者となっている。執筆者は一三八人、その中心となっているのは、原書刊行当時はフラーやホイートンの教授たちで、今はシカゴのトリニティの教授となった人たち(テニイ、リンゼル、カーネルなど)、それに、ゲルストナー、バーナード・ラム、レイアード・ハリス、ウエストミンスターE・J・ヤング(五年前故人となる)、ヴァン・ティル、ダラスのワルヴァード、ウンガー、ナザレンのオール・パーカイザー、K・グライダ、アズベリーのH・クーン、同系のパウロ・リース、また英国のF・F・ブルース、パッカー、オーストラ

リアのレオン・モリス、スイス(今は米国ギストンのゴールドン神学校教授)のロジェ・ニコル、といった顔触れで、米国の保守神学界を総動員している。

名前が神学事典とあるだけに、今では多少古臭くなった項目は、関係事項に一まとめになっているが——たとえばスープララプサリアニズム(墮落前予定論)は予定論の中に——それぞれの項目では、相当に深入りした解説も見られる。

また執筆者が広範囲にわたったために、内容的に調整できなかったものもある。終末論関係で言えば、英国のキヤメロンがキリストの降臨(来臨と訳しているが)を、ハリソンがキリストの再臨、英国のキーヴァンが千年期、F・F・ブルースが終末論を、というように分担しているが、降臨、再臨、千年期は終末論の中の一分野であるのに、その関係が不明瞭なのが惜しい。千年期の項目は、よくまとまっているが、見出しには原書のようにはっきりとゴチック活字なり何なり使用してわかりやすくすべきなのに、初歩者にはチョツとわかりにくいと考えられるのは、筆者だけのやぶにらみだろうか？

翻訳というよりは編集上の問題を二つばかり示唆したい。第一は、英文索引と和文索引との対照の仕方である。翻訳であるからには英語を十分に読めない人を対象にしたのであろうが、訳語の対照表(英→邦、邦→英)を別刷カードにする方が便利であることと、巻末の和文索引に、英文を並列することと、英文索引の方に頁数を入れた方が親切ではなからうか、それとい

うのは、問題を検討する場合に訳語の相違が大きな妨げになるからである。

第二は、各項目の終りにある参考文献のことである。筆者が目を通した範囲では、邦訳されたものがかなりあるのに、そのごく一部しか掲げられていない。甚だしい例は、ルネ・パーシユの「再臨」が、キリストの再臨や千年期などの項目の参考書リストにあるが、パーシユの邦訳も十年前に刊行されているのに何の表示もない。読者のために、こうしたものの一覧表を作製して挿入する位の親切があってもよいと思うがどうだろう。第二版に補遺として印刷挿入されるまでには、まだまだたくさん邦訳されるだろうが、一年目位にこうしたものを添付すれば、もっと購読者が多くなるかもしれない。

項目的に言えば、教会史・教理史的な面が割合に多いが、説教、牧会学の分野はまことに貧弱である。カール・ヘンリイが「人間」の項目で取り上げただけでは不十分である。もつとも、この分野は、最近発展している論議でもあるが……。

ちと専門的に評論した点は別として、牧師・神学生必読の書である。書棚にぜひ並べていただきたい。

(東京聖書学院院长)

ミルドレッド・B・ワインクロープ著

大江信訳、瀬尾要造校閲

『ウエスレアン・アルミニアン神学の基礎』

昭和四七年 福音文書刊行会

佐布正義

本書は、著者がその序文でも表明しているように、「ホーリネスの教理を明らかにし、また力説する」(P1)ことを目的とした護教的使命をもった書である。従って、「ホーリネスの教理はキリスト教信仰のいっさいの中心」とする視点から(P13)、「特定予定の理論と、ウエスレーの聖化の概念の比較」(同)を行ない、「予定から聖化へ至るただ一本の糸をたぐって」いくつかの複雑にからみ合う諸説の誤解や謬見のもつれをほどきながらもカルヴァンの「予定の教理とは鋭く対立し「ホーリネス」の教理を擁護する。それと同時に「ホーリネス派の教会、またホーリネス運動の存在理由」(P16)をも鮮明にしようとする意図も明らかである。

全六章から成る内容は、先ずさまざまな予定説とそれに関連した論争と教理の展開を教会史の中にとどることから始められ

ている。

I 個人的予定の教理の背景 ここでは、初代教会に見る教理から、ペラギウス・アウグスティヌス論争までを扱っている。

II 個人的予定の教理の発展 ここでは、アウグスティヌスの概念から引き出されたカルヴァンの個人的・二重予定の概念と「聖定」を一瞥し、アルミニウスの聖定の概念を紹介している。ここで著者は、アルミニウスの教えに「われらの予定(ホーリネス)」の教理の基礎を見出しているの、彼の教えを要約する。(「1予定に関するアルミニウスの諸原理。a 予定の教理は聖書的であるべきで、最初に論理的、哲学的であってはならない。b 予定はキリスト論的。c 救いは福音的、キリストによる個人的信仰による。d 神を罪の創始者としてはならない、人間を自己の救いの創始者としてはならない。2 四つの聖定・アルミニウスの予定の理論。a 選びとはキリストであり個人ではない。b 『キリストにある』点の強調。c 先行恩寵。d 神の予知に基づく予定―信じる者、信じない者の予知による。') 以上のように要約し、ここに彼は聖書的きよめの基礎を据えたとする。

III カルヴァニズム、アルミニアニズム、ウエスレアニズムの神学的特徴 この項ではドルト会議の争点を挙げ、超カルヴァイン主義、アルミニアンを経て、ジョン・ウエスレーの神学的貢献を論じる。「アルミニウスは聖定の『牢獄』から信仰を解放したが、ウエスレーはその解放された『信仰』をとって、ま

さしく宗教の中心に置いた。こうしてルター『信仰による義認』は『信仰による聖化』という双子の真理を得た」という言葉は著者の立場をたたくまずに表明したものであろう。

IV 古典的神学に与えたウエスレーの影響 から始まる後半においてはカルヴィニストとウエスレーアンの神学的根柢の相違を明らかにした上で、二つの思想の融合を見ようとするが、「不思議な混乱した神学」にはあきたらず厳しい対立へ進んで行く。

V 特定の教理の提起した神学的緊張状態 の項へ進むと、「神の意志と人間の意志」の緊張状態に論及する。カルヴィニズムの予定論において神が絶対主権者ならば、人間には道德的責任の余地が残されているか、という問いである。著者はこの問いに三つの面から答えようとする。「一、人間の人格性、二、人間の社会的関わりにおいて、三、聖書の教えから一人は道德的責任が与えられ、正しい選択ができる者であり、そう義務づけられてもいる」と見ている。ここで著者は、ウエスレーの恩寵観を挙げて、カルヴィニズムにおける神の主権者としての力と、神の正義を強調しているアルミニウスの説と対比し、ウエスレーによる神の愛を強調する。「神の行為は、神の創造の意志や、なにかの内的必然性から出るものではなく、その愛から出るものである。神の恩寵は、活動している神の愛である」と言うウエスレーの言葉(P144)を引用し、更に「愛は実際の力である。ホーリネスは実際の、生きた、成長しつ

井門富二夫著

『世俗社会の宗教』

日本基督教団出版局

山中良知

本書は、現代日本におけるキリスト教をはじめ、各種宗教集団の信仰的、伝道的、組織論的診断学を提唱している。従ってそこで用いられている方法論は、教理的神学的分析をはじめとして、社会学的、社会心理学的、宗教社会学的、歴史実証的、対象実証的、比較宗教学的方法を縦横無尽に用いている。社会学では、第一に集団論の中のアソシエーション論、全体社会論では社会変動論などが把りあげられ、現代社会は一体いかなる歴史の変遷を経て現代の精神構造をもつに至ったか、その近代化の類型の中で、各種宗教が、どのように適応し、自覚し、実践してきたか、現在どのような状況であるか、将来どの方向に行くべきであるか、また文化の一形態としての宗教がもつ社会的機能が、変遷過程の中で、各種宗教のそれぞれの特色をもつて、自己塑像を遂げてゆく状況が述べられている。その過程は、さらに具体的には、国家の変遷とそれからくる法的規制の功罪、個の意義の問題、ゲマインシャフトか、ゲゼルシャフトへ

つあるもの……愛はわれわれを神のみもとへ駆り立てて行く、そこに保障があり、「キリスト者生活に必要なすべてのものがホーリネスの意味するもの、内容なのである、ホーリネスは愛である」(P193)と著者は結論する。そして、その「愛とは、抽象的な、帰与される、原理上の救いで、事実上のものではない非現実的な救いではない。愛とは……われらの存在と人格のあらゆる要素を、聖霊の内在によって、主イエス・キリストの支配にいたらせる神の恩寵である」と言う。この故に、「たましいの回復」を無視する神の聖定による救いと真向うから対立する」教理を高調するのである。第六章ではウエスレーアンの聖霊の教理を扱っている。

キリスト者の實際生活の面から見た「聖化」の教理を救拯論全体に適応し、これをその中心に位置付けるのが著作の意図なのである。

(中央聖書学校教授、日本アッセンブリー教会中央福音教会牧師)

の移行の中で既成宗教の自衛的体質改善と新興宗教の成立理由の問題など、多岐で複雑な問題が、まことに論理的明晰さをもつて論ぜられている。すなわち、理念型をそのつど駆使しながら、理路整然とすめられているので、読者に内容をしっかりと理解、印象づけるので、有難い。その点他宗教が論ぜられているときでも、他山の石としてアナロジーが想起され、プロテスタントの中でも、各種教団のもつ特色とそれからくる伝道の相違が手際よく展開されている。今まで、プロテスタント神学プロパーから演繹的に伝道論を考える傾向をもった者には、この社会学的、実証的アプローチは非常に参考になるのではないかと思う。

さて、全体は三部より構成されているが、第一部は地縁的性格をもつチャーチから、自由意志的結合集団であるデノミネーションへの移行、すなわち、講制度から法座制度への移行、権威主義、教師中心主義、集団主義の崩壊から、自由選択的、機能主義的集団への移行が説かれ、現代の世俗化、都市化の中でも、布教、伝道の技術の特色がとりあげられている。布教のためには、教師中心ではなく、中間リーダーの役割が重視されねばならない。伝統が崩れ、大衆の接触を具体化し、またそのあとで教育してゆくという二段がまえの布教も考えられている。これは、国家の保護を離れて、自律してゆく課題を担う既成宗教の道である。

次にデノミネーションの新しい組織の特色は、信仰規準と区別される、自律的事務体系財政事務局の存置にある。ところで、チャーチからデノミネーション（これは著書全体にわたって各方面から問題にされている）への過程の中で、信仰の高い水準を示しながら、この世に対して「防衛的、非庶民的」で、教職はカリスマ的となり、「その信仰の質を気にするあまり、世俗社会の量的拡大の早さの中に、自己が埋没しつつある状況に気づかない悲劇を示している」という描写は、福音主義の教会に対しての警告ではないかと考え、多少耳のいたい点があるのではなからうか。

第二部は「社会階層と宗教集団」という題をかがげ、副題として「わが国プロテスタントの社会的体質」と付けられているところから、初めに日本伝道を志したアメリカ宣教師が、アメリカのどのような信仰運動の中で、どのような使命をもち、日本にやってきたかが記されている。当時のアメリカの教会状況、精神的、社会的状況、神学的傾向が詳しくのべられ、なかでもカルヴィン派の運動とアメリカ社会の解体期の世俗主義を批判する選民意識の交点に日本伝道が始められ、第二の問題として伝道上の合同精神による促進、第三、「われこそは」という、神の国の進展のために開拓の国に伝道しなければならぬという使命感の動機などがあげられている。それから、日本に訪ずれた宣教師の人物像と説教中心と教育中心の方向がとりあげら

れ、ミッシオン・スクールの問題が考えられ、多くの参考となった。

次に初期キリスト教会の分布として「都会に教会が多かった」とか、知識層に多いとかを統計的に実証していて、大体的傾向として「大都市、文化定着地、交通の要点、キリシタンの伝統のある地」に多く、逆にいえば、「未開拓地、人口集散地、神道、仏教の有力な地、交通に制限のある地」が伝道に不向きであると説かれているところは、現在も大体その傾向にあるのではないかと考えられる。その原因として「伝統的な異教臭の問題、伝道当事者である牧師や中核信徒の知識層的な心理的限界」などがあげられている。

さらに、前期の時代の信徒は、「旧社会からほり出され、全国から上京した洋学生に多い」し、没落士族から出て、不満分子による権力批判がキリスト教信仰と結びついたとみられている。また信徒の類型の変動として明治三十年代から資本主義の発達により、キリスト者の中に会社員、実業家が多くなったといわれている。この「新しい信徒層の誕生」は、教会自給を方向づけたが、それは一方では西欧からの独立と共に、「国家権力への妥協」であり、「経済上政治上の独立を意味する限り、伝道の強化であり、国家主義への消極的反抗」とみられているところは、面白い。このような経済上の問題は、ミッシオン・スクールの学生が中産階級家庭の子弟であることを同時に裏付けている。

現代論では、デノミネーションが大衆社会の中で、どのような階級、社会意識、学歴の人から構成されているか、そこでの大衆信仰が「会員の平均した欲求に答えられる」性質をもっていることが論考されている。このような大衆化の社会における伝道は、当然、マス・メディアを利用する間接伝道や平信徒教師の活動、教会の建物中心より、個人宅の利用などが説かれ、その方法をとらないプロテスタントは、「インテリ」の宗教として孤立し、「伝道の壁につきあたって」いる。現代産業社会で孤立を脱し、広く伝道する集団は、個と全体との力のバランスを考へるべきである。「家」を離れ、都市化の社会に、ほうりだされ、孤独と精神の空白を経験した結果、「自分自身の新しい信仰」をその教会の組織の中で見出したからである。しかしそれだけに「流動的で出入りが多い特徴」がみられるし、新興宗教の成功は、この脈絡をよくつかんでいる。ここで著者が全著書を通じて一貫して述べていることとして、現代人の宗教的空白化は、一方からは、無宗教化のようにみえるが、他方からは、真の宗教をうけ入れるために、旧い慣習からの解放をもち、世俗化の社会はその点、高いアソシエーション化を達成する可能性をあたえていると論ずる。その点、旧き時代は、宗教にとってよき時代であると単純に断定出来ないのと同じであらう。

第三部は、ウェーバーの近代化の概念を用い「比較史的方法」

により、アメリカでの宗教、倫理との関係における「個人概念、合理主義概念」の理念型をとらえている。第二部からの連関をもちつつ、近代化が政教分離下の庶民の一般化を個人の自由な決定の可能性との連関でとらえ、デノミネーション化の第一促進者として、メソジズムをとりあげている。

三部の第四章では「大衆社会における間接布教」という題で、人口流動によって都市社会化した集団の個人は、一方自由選択的意志をもちながら、他方「自分の欲求の弱味にふれる宣伝力によって支えられる無力な者となる傾向がある」とのべられ、都市の個人が不安であると共に、「自分のまわりの人の走る方向に走る」という特色をとりだしている。このような状況下で宗教放送の方法、効果などが実証的にこまかにとりあげられ、「ルーテル・アワー」の「相当高い聴取率」が記されているなど参考となる。第五章で政教分離下の宗教団体に課税すべきか否かの論議が多く、著者の説を通して述べられ、宗教法人の精神面と法的側面が分析されているが、これは逆にいえば、靖国神社国営化の問題と裏腹となっているので、参考となる。国営化出来ない政教分離の理念を徹底化すれば、宗教法人の課税問題が浮びあがってくる。また非課税は「一般市民の税額増加」の原因をつくり、宗教を一般市民が援助することになり、政教分離の原則に反する。このことはやがて、激しい論議をおこす問題となるのではなからうか。

以上述べたところは、無論評者の目に入ったところの概略に

すぎないが、全般にわたって、現代教会の精神的、実践的、社会的、法的課題がとくに日本を中心にして、英米との連関において述べられている。アメリカの宗教の研究が著者の研究歴の主要部分であるだけに、日本をそこからのアナロジーとしてみる傾向がつよいので、日本の社会の特殊性の中での教会の問題を論述する新しい著作を期待したい。評者として一寸述べておきたいことは、予定論と伝道とは反対概念として理解されているが、これは神学的にも、実証的にも誤りであると思う。無論著作の中心問題でないで、ここでもとりあげる必要もなかったが。

この六百頁に近い大著として、社会学的、実証的概念を媒介にした伝道論の展開は、他に見当らないし、少くとも教会のプロのレベルでは、実践的課題の解決のため必読の本であること確信し、推薦したいし、アメリカに神学研究のために留学する人も、この書の知識を予備知識としてもっていることは、大きな参考となると思う。

以上。

（日本改革派神港教会長老、関西学院大学社会学部教授）

「私はただ一つのこと、天への道、あの幸福の岸へ無事に上陸する方法を知りたいのである。神ご自身がその道を教えるためにご自分を低くして下さった。この目的のために、神は天から来たもうた。神はそれを一つの書物の中に書きつけた。ああ、その書物を私に与えよ。ぜひとも神の書物を私に与えよ。私はそれをもっている。この中には、神のために十分な知識がある。私をして一書の人たらしめよ。だから、私は人々の喧噪からはなれてここにある。私はただひとり坐っている。神のみがここにおられる。神の面前で、私は神の書を開き、読む。天への道を発見するためである。」（上巻、41、42ページ）

「私が読んでいる事柄に関して、疑問があるか。意味の明らかでないこみ入ったように見えるものが何かあるか。私は光の父なる神に私の心を上げる。……そこで私は『霊によって霊のことを解釈しながら』（コリント人への第一の手紙二の二三）、聖書の平行の章句をさがし考究する。私はそれについて、私の

心に可能である限りの注意と真剣さをつくして、熟考する。もしまだ疑問が残るならば私は神の事柄に経験をつんだ人々に相談し、それから、死んでいてもなお、こういう人々がそれによって語っているような書物に相談する。そして、このようにして学んだものを私は教えるのである。」（上巻、42ページ）

「したがって、以下の諸説教において、聖書の中で、天への道に関し私が見たものを、書きとめた。人間の発明にかかるすべてのものから、この神の道を区別することを目的としてである。私は真の聖書的・実験的な宗教を描写しようと努めてきた。その宗教の真正の部分をしていすものはすこしももらすことなく、そうでないものは何もそれにつけ加えることのないようにした。」（上巻、42ページ）

△説教集の序文V中のもっとも有名な箇所である。三つに区切って引用したが、最初の箇所に、聖書を「神の啓示（救い）の書」として認識したウエスレーの聖書観をうかがうことができる。また次の箇所に定石通りの解釈の原則をきちんと踏んでいったウエスレーの聖書解釈を認めることができる。そして最後の箇所に「福音」を厳正、正確に伝えようと努めたウエスレーの説教の性格を見ることができ。

「ウエスレー著作集」の3、4、5として刊行された、ジョン・ウエスレーの「説教」（上、中、下）三巻は、E・H・スグデンの編集になる「標準説教集」の邦訳である。ウエスレーの「全集」に収められた説教は一四一に及ぶが、ここには、こ

れらの始めの方に置かれている、いわゆる四四の「標準説教」と、これらの主張を補う九の説教、合計五三の説教が収められている。

ウエスレーの説教の中でもっとも重視された「標準説教」とはどんなものであつたらうか。それはウエスレーの「新約聖書註解」とともにメソジスト会の「教理標準」として採用されたものである。のちにアメリカにおけるメソジスト会が英国のそれに先立って独立し、教会の形態をとらなければならなくなつた時、ウエスレーは英国教会の三九の宗教簡条を改め、二五のメソジスト「宗教簡条」をつくつた。これらの三つがメソジスト教会の「教理標準」である。

ではまず四四の「標準説教」が扱っている主題について注目してみよう。ウエスレーはこれらの説教でどのような主題のものを扱っているだろうか。それは、罪と悔改め、信仰義認と聖化、信仰の確証、キリスト者の完全など、おもにキリスト者の救いと生活に関するものである。組織神学上から言えば、神論、キリスト論などを詳細に扱ったものは入れられておらず、全部、罪惡論、救拯論、クリスチャン倫理などの領域に属するもので占められている。勿論このことはウエスレーが他の領域を軽視したからではなく、当時の英国と英国の教会がおち入っていた霊的暗黒に対応し、これを救済するために聖書の救いの教理と体験と実践を明らかにする必要があつたからである。

次にウエスレーの説教の性格について少し述べてみよう。彼

の説教にはいくつかの顕著な特色がある。第一は聖書的（釈義的・福音的）なことである。このことは冒頭に引用した八説教集の序文Vの中で十分看取することができよう。どの説教を見ても叙述全体が聖書の思惟に貫徹され、数多くの聖句が結び合っている、有機的の一体となり、自然の流れのように連なり出てくるのを見るのである。第二は教理的なことである。ウエスレーはどの説教でも救いの教理を明白、克明に説いている。感情を刺激したり、思弁を興しませるようなものは皆無に等しい。今日流の例話一つない。一切の贅言を切り取った全くの教理説教と言えよう。ただしだからといって、ただかたくて無味乾燥だ、というのではない。教理が体験と実践に結びつけられ、特有な味わいを出しているのである。第三に体験的なことである。ウエスレーは聖書を釈義し、そこから教理を究明するということだけでは終わらなかった。彼は聖書釈義の根本性・優位性を明白に認めていたが、それをどこまでも自他の心と生活の体験と実際において確証しようとした。聖書の釈義と体験の確証があいまって彼の救いの教理を形成していったのである。第四に霊的なことである。彼の説教を読んでもっとも深い感銘を受けるのは、生来の人間の墮落した状態から始って、新生前後の状態さらに新生した人間の状態に至るまで、じつに綿密にその霊的状态を観察、把握し、それぞれのプロセスについて全く適切な福音的指針を用意していた、ということである。第五に実際的なことである。ウエスレーの救いの教理の中でもっとも特色的な

ものは「信仰の確証」と「キリスト者の完全」である。特に後者は心と生活の聖化に関するものでありそれはもっとも深い内的宗教（意図や気質に及ぶ）から、神と隣人を愛する生活の全域にわたる実践までを含んでおり、彼の説教には実際の要素が数多く扱われるようになる必然性があつたのである。以下許された紙面で、順次に説教題をあげ所々説明を加え責を果たすこととしたい。

△信仰による救い▽

△九分信者▽ ウエスレーは△序文V中に説教でとくに望んでいることを二つあげている。一つは「ちょうど今日の方向へ進み始めた人々を、形式の拘泥や単なる外形的宗教から防ぐことである。」（上巻、43ページ）と言っている。これは「自分自身の義を立てようとして、神の義に従わない」律法主義を警戒したものである。

△眠れる者よ、目覚めなさい▽△聖書のキリスト教▽△信仰による義認▽△信仰による義▽

△神の国への道▽ 真の宗教の性質がよく説かれている。それは主として形式や儀式、また単なる正統的な教えや正しい意見から成り立っているのではなく、「義と平和と聖霊における喜び」によって成り立っている。

△聖霊の最初の実▽ 新生後の聖霊による歩みと義認の恵み

の持続の関係を説いたもの。ウエスレー神学の主要点の一つ。△奴隷の霊と子たる身分を授ける霊▽「生まれながらの人」と「律法の下にある人」と「恵みの下にある人」の状態を説いたもの、ウエスレーの霊的洞察の深さをよく示す。△霊のあかし▽△われわれ自身の霊のあかし▽ この二説教は、ウエスレー神学の「信仰の確証」に関するもっとも重要なもの。

△恵みの手段▽ ウエスレーが△序文V中に、とくに望んだもう一つのもは「心の宗教、愛によって働く信仰を知っている人々にどんな時でも、信仰によって律法を空しくしそのことにより悪魔のわなに落ち込まないように、と用心させることである。」（上巻、43ページ）と言っている。これはモラビア派の神秘主義的静寂主義の反律法主義的傾向に対する警戒として生まれたもので、メソジズムの規律主義をよく表わしたものである。

△心の割礼▽「キリスト者の完全」に関する最初の説教であり、注目に値する。

△新生のしるし▽△神から生まれた者たちの偉大な特権▽ この二説教は新生者の標準を扱ったもの。「すべて神から生まれた者は罪を犯さない。」ということに関するウエスレーの釈義と主張を知るのに大切なもの。これまたウエスレー神学の主要点をなすもの。

△われらの主の山上の説教について▽（一）—（二三） 山上の

説教を講解した一三の説教。「キリストの宗教の全計画」「キリスト教の全眺望」「だれもそれを持っていなければ主なる神を見ないあの聖潔の本性」（上巻、412ページ）として受け止め、五章を真の宗教の概略（内的宗教の気性）、六章を外形的宗教の基礎づけとしての正しい意図の基準、七章を宗教をおもに妨害するものに対する警告として扱っている。ウエスレーの説教の諸特色がよく出ている。

△律法の原形・性質・属性・用法▽△信仰によって確立される律法▽（一）、（二）△宗教的熱狂の性質▽ これらは反律法主義を退け、真の福音主義の確立のために戦ったウエスレーの真面目をよく示す。

△頑迷に対する警告▽△カトリックな精神▽ この二説教は聖書のエキュメニズムのための好資料と言えよう。

△キリスト者の完全▽ いうまでもなくこの主題に関するもっとも大切なもの。

△聖化の約束▽ 弟チャールズの詩

△さ迷う思い▽ 「神からさ迷い出る思い」と「われわれが考察に取りかかったその特定の点からさ迷い出る思い」とを區別して説く。（下巻の説教は省略）

冒頭のウエスレーに関するE・ルイスの論文、巻末の訳者のあとがきが参考となる。

（巣鴨聖泉キリスト教会牧師、聖泉神学塾長）

最近の神学関係英語文献

宇田 進

一

最近における福音的な組織神学関係の文献のおもだったものを紹介するのが、私に課せられた責任であるが、よい機会でもあるので、それにはいる前に、研究上有益と思われる二、三の文献リストをあけておきたい。

その一つは、WCCの Theological Education Fund から出されている *A Theological Book List* である。これは、一九六〇年にその第一号をもって産声をあげ、その後一九六三年号、一九六八年号、そして最近一九七一年号が、それぞれ一九六〇年号の補足という形で出されているものである。内容について最新の一九七一年号を例にとってみると、まず再版もののリスト、雑誌に関する情報、シリーズものの一覧表、各分野の出版状況に関する専門的研究家による分析、神学校図書館の組織と運営に関する文献紹介をのせた上で、辞書および事典、聖書、旧約、外典および偽書、死海写本、新約、新約神学、教会史(時代、教派、地域別に分類されている)、伝記、伝道および

び教会成長、エキメニズム、宗教哲学および倫理、教理(論、各論とともに、二十世紀の代表的神学者たちの思想分析に関するものも含んでいる)、牧会学、サクラメント、比較宗教、キリスト教と他宗教との出会いの順で、英・仏・独・スペイン語の文献が、リベラル、コンサーバティブを問わず、もれなく紹介されている。一つのテーマについて本格的な研究をなそうとする場合、最初に最も完備した神学専門の図書館に向き、テーマに關係を有する文献・資料のチェックを行なうことは常識であるが、日本にある福音的な神学校の図書館は、いずれをとってみても残念ながらこの必要を満たしてくれるものはない。だが、この文献リストだけは、WCC所属の神学校ばかりでなく、主要な福音的神学校にも配布されているので、是非活用されることをおすすめしたい。

次に、最近のものとして年四回出ている *Christian Periodical Index* というのを憶えておかれると有益である。これは、米国のホートン大学に事務所を持つ *Christian Librarians' Fellowship, Inc.* という福音的な機関が、英語圏で出版されている三十六の福音的な雑誌に掲載された論文と書評とを項目別に分類した総目録である。福音派内の最新の研究情報をキャッチする上で必ず目を通さなければならぬリストといえる。さらに、これとともに、福音派の雑誌として最大の発行部数を誇る *Christianity Today* (隔週)が、年一回行なっている「文献特集」を参照すれば一層完璧であろう。一九七二年のそれは、本年の

三月二日号(第十七巻、十一号)であることを参考までに付記しておく。

なお、ついでのことながら、福音的立場の編集による総合的な英語文献リストとして、*A Guide to Christian Reading* (IVF, 1962 最近改訂版が発行された)や *W. Grier: The Best Books—A Guide to Christian Literature* (The Banner of Truth, 1968) のあることは、大方の知る所と思う。現在、筆者は、一つのプロジェクト・チームによって、日本における福音的な文書の総合リストを作製中である。これは日本の福音主義教界への一つの奉仕として進めているものであるが、日本に宣教師を送っている世界中の宣教団体や、日本に関心を持っている色々な教会団体からも多くの関心を寄せられている。近い将来にその完成を期したいと願っている。

二

従来、福音主義神学は、自由主義神学にくらべ方法論的自覚が薄かったことは認めなければならない。特に現代の諸思想や、現代神学が提示している試論・試策を十分そしゃくした上で福音的立場を立証するといった努力は少なかったように思う。この面で注目したい書物が二つある。

一つは、トリニティ神学校(David F. Wells や Clark H. Pinnock 編集)の *Toward a Theology for the Future* (Creation House, 1971, 329pp. \$4.95) である。これは、今日、

決定的意義を有する行動が起りつつある領域を明示しつつ、現代神学の混迷の中で建設的にして福音的な方法上の方向と試論とを指し示そうとの意欲をもって、十一人の福音派の神学者(うち三人は若手)によって書かれたものである。聖書学関係では、131-155頁の *Introduction to the Old Testament* (1969) や *Old Testament Times* (1970) など、おなじみの R.K. Harrison による論文——クムラン文書の研究を通して旧約文献批評学の非科学性を明らかにしている——をはじめ、福音書はイエスの実際の教説よりも初代教団の信仰を伝えているものとする様式史の根本主張に対して、イエスの説話の研究の面からそれにチャレンジする E. Harrison の論文、聖書神学の福音的方法を追求する P. Robertson の論文などが特に目につく。神学関係のものでは、ペンノックが、現代神学に対する実証科学の強い影響を分析批判しつつ、神の言葉と現代人との相關關係に關する福音主義版ともいうべきものを試みている(ティリッヒのそれと比較されたい)。そのほか、B. Ramm の「希望の神学における倫理」、H. McDonald の「文化の神学」、S. Obits のハンス・キェンク分析、G. Bromley の教父学に關する啓蒙的な論文などが収録されている。

方法論に關係しているもう一つのは、E. Geehan 編集による *Jerusalem and Athens—Critical Discussions on the Theology and Apologetics of Cornelius Van Til* (Presbyterian and Reformed Pub. Co., 1971, 498 pp. \$9.95) である。これは、表題

が示す」といわれる常識の哲学 (Common sense philosophy) を土台としてきた従来の弁証学のナイーブさを批判しつつ、一個の思想に内在する「前提」を鋭く洞察分析し、あわせて人間のうちに真の「メタノイア」を生む新しい弁証学を打ち建てようとするヴァン・ティルの思想をめぐるものであるが、執筆者の多様にして堂々たる顔ぶれからいっても (Dooyeweerd, Stoker, Tripp, Berkouwer, Zuidema, Ridderbos, Melkes など) — 以上オランダおよびアメリカ。Hughes, Packer, Montgomery, Holmes, Jewett, Reid, Pincock, Rushdoony など — 以上英米) また寄せられた各論文の内容からいっても、福音的立場の神学方法論についてこれほどの突込みがなされた著作は今までになかったのではないかと思う。特にハイガニスム (これははっきりとした一定の前提に立つ一つの体系である) との「全体戦争」(total war) を余儀なくされている日本の福音派が、真に根深い宣教をおし進めて行くという時、しっかりと方法論を持たなければならぬことは自明の理である。この面で多くの示唆を与えてくれるのが本書である。

三

キリスト教教理の全体を扱った最近のものとして、次の二つがある。

その一つは、Carl Henry 編集による *Basic Christian Doctrines* (Baker Book House, 1971, pK., 302pp., \$3.95) である。

啓示論 (J. Gerstner)・聖書論 (R. Preus)・宇宙論 (G. Clark)・人間論 (F. Klooster)・罪論 (O. Buswell)・贖罪論 (R. Nicole)・歴史観 (C. Singer)・史的イエス (B. Van Elderen)・キリストの復活 (G. Ladd)・聖霊論 (R. Roth)・再生論 (R. Knudsen)・信仰論 (V. Grounds)・義認論 (L. Petersen)・聖化論 (W. Young)・教会論 (W. Robinson)・終末論 (H. Kuhn) の順に、福音派の見解とそれの弁証がなされ、巻末には各項目に関する主要な福音的文獻のリストが加えられている。次に各論に移りたい。まず、聖書論に関する最新のものの一つ John Wenham: *Christ and the Bible* (Tyndale Press, 1972, pK., 206pp., UK 75p.) がある。著者は、すべし *The Elements of N.T. Greek* (CUP) や *The Renewal and Unity of the Church in England* (SPCK) によって知られているが、目下のある聖書論に取り組んでおられる。本書は著者が意欲的に計画している四部作の最初のものである。著者ウェンハムによれば、納得の行く聖書論はあくまでも聖書の証言そのものに基づくものでなければならない。ところが、今日、肝心の聖書の証言そのものが疑問に付されているのが実情である。こうした状況の中で聖書論を正しい方向に展開して行くにはどうしたらよいのだろうか。その解決の道は、キリストへの信仰という原点に立ちもどり、次にキリストご自身が抱いておられた見解をできる限り正確に認知し、それをガイドとして進めて行くことであるという。こうした確信に立つて、イエスの旧約

これは、かつて *Christianity Today* 誌上に「基礎教理」シリーズとして連載された四十三の教理項目に関する福音主義神学者たちの小論文に、編者ヘンリーの序論と、R. Nicole の「神学に関するあとがき」を付して一冊にしたものである。全体の構成は、大筋において Berkhof: *Systematic Theology* などスタンダードの教義学者のそれに従っている。だが、執筆者の顔ぶれが国際的かつ超教派的であること、また、一つ一つの教理を扱う際に、その基本的な聖書の解説をきわめてコンパクトな形でなしているとともに、たえず現代の思想や現代の神学との交渉を忘れない点などがおもな特色といえよう。

もう一つは、同じヘンリー編集による *Christian Faith and Modern Theology* (Baker Book House, 1971, pK., 426pp., \$3.95) である。これは、一九六一年、ニューヨーク・ユニオン神学校を会場にして開かれた福音派の「ブルトマン・セミナー」を背景として生まれたものである。ところで、このセミナーは、当時、ヨーロッパ・クルセードの諸経験を通じて、現代のリベラルなキリスト教との対決の必要を強く感じて帰った、ビリー・グラハムの後援によるものであったことも興味をそそる事実である。伝道と神学は、あたかも車の両輪のごときものであることがはっきり認識されているわけである。内容は、まずはじめに、「二十世紀のヨーロッパ神学」(H. Sasse)、「二十世紀の英国神学」(J. Packer)、「二十世紀の米国神学」(E. Osterhaven) の三つの展望的論文をあげ、続いて神論 (C. Henry)・

聖書観・教師としてのイエスの權威・イエスの主張に対する反論・新約の記者たちと旧約聖書・イエスと新約聖書・正典の範囲・聖書本文の信頼性などの問題を、最近の文獻をよくあたりながら取り上げている。本書の続刊として、聖書中の道徳上の諸問題・旧約批評学が提起した諸問題・福音書の異同の問題をそれぞれ扱った著作が計画されているので楽しみである。

神論に関して、今日大きな影響力を有する *Sontagsblatt* 紙の神学編集者の地位にある Heinz Zahrnt の *What Kind of God — A Question of Faith* (Angusburg Pub. House, 1971, 279 pp., \$5.95) は、厳密には福音派のものとはいえないが、世俗的キリスト教などが唱える「神の死」の主張に対して、「たとい人間が神を求めることやめても、神は死なない。むしろ人間が神の問題をもちや問わなくなる時、人間は人間であることをやめる」と応酬しながら批判を試みている。特に、神の死を主張する神学が啓蒙思想を不動の出発点としていることの問題性、イエスを革命家とみなし、福音を社会改革理論とすりかえるいわゆる「政治的神学」の矛盾、さらに、現代において神の人格性をどのように語ることができるか、この科学技術時代において神学的言語はどのように位置づけられ得るか、などの論述から福音主義者も多くの示唆を与えられる。

大分前のことになるが、筆者は、「聖書雑誌」(現「聖書と教会」)の座談会「イエス伝研究をめぐって」(一九六八年三、四

月号収録、七〇年に単行本として日基教団出版局より刊行)の席で、史的イエスの探求をみのある方向に進めて行くための一条件として、聖書の創造の教理——現代神学において時間創造という面は欠落し、創造記事は一種の象徴にすぎなくなっている——をシリヤスに取り上げ直すことを思い出すのだが、最近、世界的な環境汚染、食品公害、人口の爆発的增加、飢餓との戦い等の現代的諸問題との関連において、創造の教理を新しく見直そうとする小著ながら大変タイムリーな書物が出版された。それがスウェーデンのルント大学神学教授 Gustaf Wingren: *The Flight from Creation* (Angusburg Pub. Co., 1971, pK, 91pp, \$2.50) である。著者は、創造論に関する

イレナイオスとマルキオンの比較研究という一九三九年の教師論文以来、ずっとキリスト教信仰における創造の教理の重要性を説き続けてきた。われわれはその経過を彼の *Creation and Law* (1961) に見ることが出来る。さて、前述の書物にもどるが、ウィングレンのテーゼは要約してみるとおよそ次のようなものである。第一次大戦から今日までのヨーロッパ神学は、一九三〇年代のドイツの *Ordnungstheologie* を例外とする以外、いずれもまるで申し合わせたように創造の教理を見落としている。しかし、キリストによる救いは、イレナイオスやルターが正しく主張したように、あくまでも創造秩序の回復 (*recapitulation*) という線を根本として理解しない限り聖書的な把握はあり得ない。この意味において、古代、現代を問わずグノーシス

的な救いの理解は、根本的な欠陥を有しているといわなければならない。著者のこのような主張は、福音主義神学が一貫して力説してきた所ではないだろうか。

今日、ラディカリズムの動きと関連して「イエスは誰か」が鋭く問い直されつつあることは周知の事実である。この中心的な問題を平易な形で取り上げているものの一つが、イリノイ州のコンコードディア神学校の教授 David Seacer: *What Do You Think of Jesus* (Concordia Pub. House, 1973, pK, 114pp.) である。叙述はあくまで平易であるが、現代のイエス伝研究をふまえながら、イエスの人格と業の独自性を明らかにしようとするものである。

終末論関係のもので特に注目すべきものは、なんといっても G.C. Berkouwer: *The Return of Christ* (Eerdmans Pub. Co., 1972, 477pp, \$9.95) であろう。これは、すでにおなじみとなっている彼の *Studies in Dogmatics* シリーズ (すでに十一巻英訳されている) の一巻で (原著オランダ語版は二巻のもので、一巻は一九六一年に、二巻は一九六三年に出版されている)、「未来待望」、「二重の待望」、「遅延の危機」、「中間時の意義」、「再臨の現実性」、「復活」、「新しい地」、「時のしるし」、「反キリスト」、「千年王国」、「しるしとしてのイスラエル」、「*Visio Dei*」、「万物更新」、「神の国」の十四章から成る五百頁に近い大著である。いつものことながら、著者の積義的・歴史的・教義学的密度の高さ、資料照合の上でのその驚くべき広さ、現代神学の

業績との対話を通じて自己の改革派神学の深化を計ろうとするためまざる努力、さらに教義的研究を志望する者への数々の示唆には実に目を見張るものがある。ところで、筆者は、福音派の終末論の今日的課題は、未来待望の意味をより一層正確にとらえること、今までいわゆる奇型の未来主義 (たとえば契約期分割主義などの千年王国説のごときもの) にわざわざいわれて欠落していた歴史意識 (歴史観といってもよい) を確立すること、そしてこの未来待望と歴史意識の両者を一つの生ける総合へもたすことであろうと考えているが、この面で示唆を与えてくれる福音派の立場の終末論は、まず本書をおいてはほかに皆無といっても決していいすぎではないと思う。たしかに「*相関のモチーフ*」 (*het correlatiemotief*) を中心軸とするベルカウワーの最近の立場は、実存論的思考の影響をかなり受けてきているという問題点は認められるが、教義学研究書としては依然福音派内の最高のものである。

ついでに、右の書物と殆んど時を同じくして出版されたルーテル派の H. Schwarz: *On the Way to the Future—A Christian View of Eschatology in the Light of Current Trends in Religion, Philosophy and Science* (Angusburg Pub. House, 1972, 254pp, \$6.95) も、未来主義にかたより、かつ迫力と緊張とを欠いて単調になりがちな今までの福音派の終末論を多くの面で補ってくれるものであることを付け加えておきたい。

四
終りに、社会倫理とグノーシス研究の領域から各一冊、最近のものを紹介して結びたい。

率直にいうと、社会倫理は福音派の弱点の一つである。いまだに英語圏の世界においても決定版ともいえるべきものは出ていない。しかし示唆に富んだ導入書はないわけではない。その最近の一つが Carl Henry: *A Plea for Evangelical Demonstration* (Baker Book House, 1971, 124pp, \$3.95) という講演・論文集である。著者はすでに一九六四年に *Aspects of Christian Social Ethics* をあらわしているが、本書は第二弾ということになる。ヘンリーはまた、もっか「キリスト教倫理辞典」の編集にあたっている。福音派は、古くは「社会福音」を、最近では「革命の神学」を批判することにおいて実に真剣であった。だがしかし、この「病める社会」に対するそれらに代わる福音的な代案を具体的に準備しているだろうか。つねに伝道ということが叫ばれているが、それも個人の魂の変革ということに重きがおかれ、社会的アンガジュマンに関する考察は見逃されているよりは教会の社会的倫理的あかしに關してなんらかの試策を示すべくあらゆる努力が払われねばならない、とヘンリーは説いている。中でも、「キリスト教神学と社会的変化」(二章)、「伝道の神学」(三章)、「革命の神学」(五章)、「個人的伝

道と社会正義」(六章)などは、われわれの社会倫理の方向や
試論づくりにとって大いに参考となる。

近年、歴史的問題とともに神学的問題としてグノーシス主義
が大きくクローズ・アップされてきた。だが、福音派の立場か
ら書かれたグノーシス主義研究書は残念ながら殆んどなかった
といえる。このギャップをある程度うめてくれる研究書がつい
最近出版された。それが二世の若手学者 Edwin Yamachi:
Pre-Christian Gnosticism (Tyndale Press, 1973, 208pp, \$2.25)
である。周知のように「ブルトマン」などは「パウロとヨハネの神
学の生みの親はグノーシス主義であると主張しているわけであ
るが、はたしてそれを証明するための十分な証拠は存在してい
るのであるか、と著者は挑戦している。著者は、いわゆるグ
ノーシス主義からのものと仮定されている新約の部分、教父の
証言、ヘルメス文書、イラン史料、シリア史料、エジプト史料、
マANDA教史料、ユダヤ教文献などを丹念に検討した上で、「Pre-
Christian Gnosticism」を主張する立場の方法論には次のような
欠陥が見受けられるとせまる。(一)多くの場合、ずっと後代の
史料をもとにしている。(二)部分的な資料をもって全体にか
わる判断をくだしていることがしばしばある。(三)不当にも新
約聖書自身を Pre-Christian Gnosticism の証拠として用いてい
る。(四)彼らが確実とみなしている並行や依存を調べてみる
と、しばしば証拠不十分である。(五)ドイツ語研究書に顕著な
現象は、ライツェンシュタインやブルトマンといったいわゆる

大物学者の権威に盲従している点である。(六)発見された史料
がノン・クリスチャンのものである場合(たとえばナグ・ハマ
ディ史料の場合など)、それを直ちに pre-Christian と決めつけ
る傾向がみられる、等である。邦語でも荒井献の力作『原始キ
リスト教とグノーシス主義』(岩波書店、一九七二)があるが、
グノーシス主義の正しい評価、位置づけをなすために、この福
音的立場より書かれた力作を是非参照したいものである。
(附記)この紹介を書いている間に、筆者の手に West-
minster Theological Journal の最新号 (Vol. XXXV, No. 2,
Winter 1973) が配達されてきた。その中にウィリアム・マッ
キルエン博士——現在は引退して米国フロリダ州ペンサコーラに
在住——による「福音主義神学」第二号のかなり詳しい、しか
も好意的内容の書評がのせられていることに気が付いた。この
雑誌は神学研究の世界でかなり広く流通しているわけで、本誌
がわれわれ多くの者が尊敬する先生によって紹介されたことは
大変喜ばしいことと思っている。

(日本基督神学校教授)
(日本基督長老久我山教会牧師)

〔学会ニュース〕

日本福音主義神学会、関西地区ニュース

鍋谷堯爾

日本福音主義神学会が発足してから三年半を経過し、関西で
も、ようやくその活動が根を下しつつある。それが道ばたなの
か、石地なのか、現在では、だれも断言することはできない
が、これまでの経過と、今後の展望について述べてみたい。

一九七〇年四月 東京にて福音主義神学会設立さる。関西在住
の理事が選出される(吉岡繁、服部嘉明、鍋谷堯爾)。

一九七一年四月 四月の東京における総会にて、関西在住理事
を増員し、関西地区での活動開始案が提出せられる。

一九七一年十一月二〇日 関西における第一回研究発表会開
催、日キ教団扇町教会にて(出席者三二名)。

「パウロにおけるエン・クリストオの用法について」村上久
「二重予定の問題をめぐって」橋本竜三

一九七二年九月 東京より榊原理事長を迎え、関西での今後の
働きについて協議。一九七一年度よりの関西在住理事、吉岡
繁、服部嘉明、中島守、橋本竜三、村上久、安田吉三郎、ク

レメント・ワルバート、フレッド・モア、山中良知、春名
純人、松田一男、鍋谷堯爾(橋本竜三、中島守両氏が、世話
人として事務を担当して下さる)。

一九七三年二月一九日 第二回研究発表会(出席者五〇名)神
戸ルーテル聖書学院にて

「初期アウグスチヌスにおける信仰」村川満
討論会(説教について)

発題者 吉岡繁、司会 中島守

挨拶 カール・ヴィスロフ

一九七三年三月二六日 第三回研究発表会(出席者四〇名)
神戸ルーテル聖書学院にて

「旧約聖書からの説教」安田吉三郎
討論会(説教について)

発題者 中島守、司会 吉岡繁

挨拶 カール・ヴィスロフ

一九七三年五月二二日 神学会関西西部会結成大会(出席者二〇
名)、教団扇町教会にて

講演「今日の神学的状況における聖書と伝承の意味」カール
・ヴィスロフ

同日の理事会で、世話役を選出、鍋谷堯爾(招集者)、橋本
竜三(会計)、中島守(書記)。

以上が、西部部会の歩みであるが、七月九日、大阪聖書神学校で開かれた理事会で、つぎのことが話合われた。

一、西部部会会員の確認の件

すでに、入会員の審査は、西部部会の方は、西部理事会で審査することが確認されているので、会費領収及び領収書の発行、会員証の送付、研究発表会への案内、会誌の発送など、西部部会で一括して行うことができれば便利である。そのために名簿の作製と、本部との打合せが必要である。

二、来年の学会規則の改正までは、西部部会理事会が、部会全体を代表して、東京の理事会と交渉にあたり、規則改正後、全面的に自主的な活動を行うものとする。

三、規則改正まで、会費及び賛助会費は、西部部会会計(橋本)に納入し、会費はまとめて本部会計に送り、当部会必要経費は賛助会費より出すことにする。

四、今後の活動に関して

a、年二回研究発表会を開くようにする。一応それは、五月と十月とする。

b、今年度一月の発表会を次のように企画する。

日時 一月二三日(金) 午前一時―午後四時

場所 改革派神港教会

発表 織田昭(新約)、谷口泰造(キリスト教教育)、高力弘一郎(キリスト教倫理)

公開講演 服部嘉明

音などと、今後、福音主義的教団の教職又は信徒が接する時、全く無防備であり、弁証も、対話もできないことを示している。

(c) 又、内においては、聖書主義に立つといいながら、生ける聖書のみ言の前に自己をくだくというのでなく、聖書を自己教派の伝統的ドグマによって読みこむという危険におちいり、説教の貧困、あるいは、激動せる社会への教会政策の硬直した姿勢となつてあらわれる。

(d) 日本人は、もともと、プラグマティックな国民であるが、教会形成とか伝道においても、み言の深みの中に自己を沈潜させることよりも、結果をえるに早急であつて、金の計算は早い、神学にはむかないとされてきた。私自身を含めて、関西ではとくにその感が深い。今、福音主義神学会の誕生が、関西に根を下そうとする時、それが、主体的に関西の土壌から芽生えてきたものでないだけに、そこに悲観的な見方をするか、それだけに、聖霊のお働きをおぼえて幻を抜けてゆくか、というあたりが将来の決め手になると思われる。

(神戸ルーテル神学校教授)

「民とその王」權威でない權威の美しさ

関西における福音主義の展望

神学会全体の方針については、昨年一〇月一五日のクリスチヤン新聞に榊原理事長がよく整理して発表されているとおりであるが、これを関西流にほんやくしてみると、

(a) 現在福音主義神学会に属そうとする人たちは、戦前からのグループでは、改革派系を除いては、神学よりも伝道を強調するグループであつた。また、戦後、発足したグループは、マッカーサーの「宣教師を一万名送るように」との声に伴い、とくに、中国の中共政権に追われて日本伝道を開始した宣教師たちによつてはじめられたものが多い。その特徴は、保守的、福音的、伝道的な特徴と共に、閉鎖的で、神学にたいする理解がうすく、神学校をつくった場合も神学するというよりも、牧師養成が主目的であつた。また、聖書信仰にたいして協力伝道とか、フェローシップの企てはあつても、神学的に、「礼典論」「教会論」「教職論」など、欧米所産の教派を分けた教義についての差異にメスを加えることなく今日に及んでいる。

(b) 以上のことは、今迄、日本において神学界の主流をしめてきた、シュライエルマッヘル学派、リッachel学派、バルト学派、ブルトマン学派など、あるいは、無教会主義、社会福

Continuing Presbyterian Church 誕生

橋本 竜 三

本年五月十八日と十九日の両日にわたり、米国ジョージア州都アトランタにあるウェストミンスター長老教会で、注目すべき集會が開かれた。集うもの千名足らずの集會であつたが、参加者は二六―一教会の会員七万名を代表する議員を中心とするものであつた。會議は圧倒的多数の賛成を得て、現在属している合衆国長老教会(PCUS)を離脱して、本年中に新教会を組織することを決議した。八月に準備集會を開催、十二月に創立總會を開催するというスケジュールも決められている。この離脱は、PCUS本来の信仰と政治を継続するためのものであつて、新教会の名称が、Continuing Presbyterian Church とされているのも新教会の意図を的確に表現していると言えよう。

合衆国長老教会と言へば、普通、南長老教会と呼ばれている会員数九十万を越える大教会であり、日本にも一八八五年以来、多数の宣教師を派遣し、輝かしい宣教の実績を持つ教会である。新しい教会の規模は十二月になってみないとわからないけれども、米国長老教会史上においては今世紀最大の分離と云うことができよう。長老教会の大規模な再編成は、すでに数年

前から予想されていた。しかし、一九七五年がその年になるだろうと予想する人が多かった。それが繰上って、本年中に実現することになったのは、合同長老教会 (UPUSA) との合同計画の行詰りという予期しない事態が生じたためであった。PCUS と UPUSA の大型合同計画は三年半前からはじめられ、合同計画案が総会に提出されていたが、この計画案には、両教会の合同によって生ずる新教会に加わらない各個教会を認める条項があった。これは各個教会の選択の自由と権利を尊重するためのものであったが、これに反対する声が合同推進派の側でかたまり、遂に、本年二月、このエスケープ・クローズと呼ばれていた条項を葬るために、三年がかりでねられてきた合同計画案を御破算にしてしまった。それには、UPUSA の黒人教会が PCUS の人種差別を理由に、合同を反対するという一つのいきさつがあった。PCUS と UPUSA の合同を機会に、このエスケープ・クローズに従って離脱を考えていた保守派の諸教会にとって、七五年まで離脱を延期する理由にはもはやなくなってしまった訳である。更に、PCUS の四つのボードの統合が本年十一月に実施されることになり、教会の中央集権化と同時に、海外宣教、内国伝道の機能を著しく弱体化すると思われる組織替えが行われたことも分離を促進する理由の一つとなった。保守派の有力な指導者であり、昨年度の総会議長であったネルソン・ベル博士 (ビリー・グラハムの義父。八月二日死去) は、現時点における離脱を強く戒めてこられたのである

が、ボードの改組に賛成したことが、保守派に失望を与え、ベル博士の説得の一つの有力な根拠となっていたエスケープ・クローズの御破算が明らかになった時、早々に離脱に踏み切ることもあったと見ることが出来る。

CPC の運動のために委員会が構成されたのは三十年以上も前のことであって、この新教会の発足までに長い戦いのあったことは見落してはならない。この間、PCUS 内で貴重な役割を果たしてきたいくつかの組織があるが、特に、レイマンの果した役割が非常に大きかった。保守派の指導者の第一人者としてネルソン・ベル博士があげられるが、外科医であり、長老であった博士の貢献は大である。

五月の集会の議長をつとめたジャック・ウィリアムソンも長老であり弁護士である。一九六五年に「PCUS の歴史的理念を保持し続けるものたちへ教会の指導性と支配を戻す目的」のために、これらの長老たちは、Concerned Presbyterians と呼ばれるレイマンの組織を作った。フロリダの実業家ケネス・カイズが会長として指導してきているが、現在では八万部に及ぶニュース・レターを定期的に刊行するまでに到っている。CPC の形成にレイマンの果した役割の大きかったことを思う時、ややもすれば教師の指導によって形成される教派と異ったものを見ることが出来る。

CPC 運動を支えてきた他の有力なグループは、第一にプレスビテリアン・ジャーナル誌 (週刊) の編集スタッフ、第二に、

Presbyterian Churchman United' 第三に、Presbyterian Evangelistic Fellowship を挙げることが出来る。

プレスビテリアン・ジャーナルは、「聖書と改革派信仰に忠実な長老教会の存続を唱道すること」を使命として三十二年前に刊行された。アイケン・テイラー博士とヘンリー・デンディ博士が編集の責任を負っておられる。この雑誌は、レイマンと教会という頁を設け、教会学校教案のための頁を確保してきたことがコンスタントにレイマンの読者層を獲得させてきたと言われている。

第二の長老派教会人連合は、一九六九年に、聖書の無謬性と教会憲法に対する忠誠を再確認する声明書に署名した六〇〇名にのぼる教職者の組織であり、CPC 運動の教育、啓蒙機関としての役割を果たした。

第三の長老派宣教師は、PCUS の宣教に対する熱心の欠如をうれえてウィリアム・ヒル師が始めた宣教師団体であるが、現在では、九名の専任伝道者を抱えた宣教師団体にまで成長し、特に、海外伝道に対する関心の増大に寄与し、ECOE と呼ばれる海外宣教師の一つとなっている。

CPC の PCUS の現状に対する一つの強い批判は、PCUS に見られはじめた宣教の熱情の欠如であり、宣教の第一義的使命の否定である。自由派の指導のもとに、社会的問題に対する関心が優先し、福音宣教の必要性と重要性は二義的なものと考えられるに到り、直接伝道に従事する宣教師の派遣は停滞

し、伝道援助は縮小され、更に廃止へと向った。

伝道援助に関して言えば、この五年間にいくつかの伝道地で毎年二〇パーセントあての削減を実施した。五年前五六七名を数えた海外宣教師は、四〇〇名にまで減少した。宣教の熱情に燃える宣教師は次々に、PCUS の世界伝道局を離れて PEF 又は ECOE に加わったのである。このような海外宣教の危機にもかかわらず、世界伝道局は、他の部局と共に統合されてしまい、海外宣教はますます軽視されるかのように思われた。

PCUS の神学の一般的傾向は、昨年草案の提出された新信条においてあらわになってきている。この信条は、一九六九年に準備が始められたものであるが、(1) 神、(2) 神と神の民、(3) 神と世界、(4) キリストにおける神、(5) 神の霊、(6) 神の言葉、(7) 神の教会、(8) 神の教会の使命、(9) 神と未来の九章だけの簡潔なものである。この草案は単に簡潔であるばかりでなく、きわめて詩的な表現を用いて、教理的表現の厳密性を無視してしまっている。また、命題啓示の立場を否定し、啓示を神のキリストにおける和解行為として捉える。従って、聖書は啓示ではなく、啓示の証言とされ、バルト的啓示理解で貫かれている。教会の使命の章を見ても、福音宣教の使命は補足的な位置しか与えられておらず、社会問題とのかかわりあい優先している。神と未来の章では、神の終末の審判は積極的に告白されることなく、全人類はキリストにおける生命の賜物を受けると言った表現がなされている。この告白は、草案にすぎないとは言え、ともか

く従来の信条との連続性を認めることはむつかしい。本年度の総会において、分裂回避のために、新信条に十戒を補足する提案がなされたが、部分的補足ではどうにもならない内容のものと言わねばなるまい。

PCUSには、なお多くの保守派の教職がとどまっており、内部において改革信仰と長老主義の保持のための戦いを続けている。現時点においては、ウェストミンスター信仰基準を憲法としてもつ教会なのである。PCUSが、今後、どのような道をたどるかが注目される。同時に、新しいCPCの責任はまことに重大である。この分離が、分派形成でないことが明らかにされねばならない。CPCが、今後、内国伝道に拘いて、外国伝道において、今までの停滞を打破ることができれば、現在、保守派と自由派の二分化のためにブレーキをかけられている他の長老系、改革系の大教会が選択すべき進路を決定するにあたって、大きな力となることであろう。この分離が、CPCのためにも、PCUSのためにも、教会の王たる方のみまえに、より一層、忠実な群となる機会として用いられるように祈るものである。

(改革派灘教会牧師、神戸改革派神学校講師)

編集後記

ここに第四号を送り出せますことを感謝しております。これで三号雑誌で終わる心配はなくなったわけです。私たち編集者の責任は、この第四号を出すことで終わりますが、また新しい編集者の手で、さらに充実した内容の第五号以下が刊行されるものと信じております。

この号の特色は、シンポジウムを二つ収録したこと、書評をできるだけ多く取り上げたことでしょう。シンポジウムⅠ(日本伝道と日本人の思惟構造)は、今年四月三十日の第四回総会で行なわれたもの、シンポジウムⅡ(創世記一―三章の解釈をめぐって)は、今年六月十八日、十九日に浦和市武蔵野会館で開かれた関東支部主催の一泊研修会で行なわれたものです。ただし、その時の発言の内容のままではなく、すべて発題者へ書き改めていただきました。巻頭の説教と、それに続く講演も、今年の第四回総会で語られたものを書き改めていただきました。書評の中で、特に宇田進氏に、最近の英語圏で刊行された神学書の紹介をしていただきました。

四年目を迎えた日本福音主義神学会の歩みで特筆すべきことは、関西地区の支部活動が本格的になってきたことです。その報告を鍋谷堯爾氏から寄せていただきました。来年の第五回総会では、関東と関西の両地区を主体にした新しい活動組織として、日本福音主義神学会の理事会を改組していくことが考慮されております。

この号は、これまでのものに比べて、かなりページ数が増えています。今度の第四回総会で、正会員の会費を年額千円から千五百円に、準会員の会費を年額五百円から千円に、それぞれ値上げすることが承認されましたので、会誌の定価も五百円の枠を越える額にさせていただきました。他に適当な紙面がありませんので、第四回総会(一九七三年四月三〇日)で改正された規約の部分を、左に掲載させていただきます。

第十条(経費) 本会の経費は会費及び献金による。

- 一、正会員の会費は年額千五百円、準会員の会費は年額千円、賛助会員の会費は年額一口五千元とする
- 一、有志の献金

(村瀬)

昭和四十八年十一月十日発行 頒布価 六百円

編集者

矢内 昭二
村瀬 俊夫
斎藤 孝志

発行者

東京都東久留米市氷川台一ノ
八ノ一五 日本基督神学校内
日本福音主義神学会

印刷

いのちのことば社印刷部

発売 いのちのことば社